

川柳の雑記

麻生路郎☆主宰



九月號

No. 376 Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

昭和廿三年七月一日第三號
昭和廿三年九月一日第三號
（每月一冊）
創刊大正十三年・通卷三百七十六號

10月本社句会

兼題
★
家風
日帰り
小鳥
底値

川柳雑誌社主催

本社川柳忌句会

木枯やあとで芽をふけ川柳

この二十三日は初秋川柳の百六十九回忌にあたります
柳翁をしのんで二人でも多く出席いたしましょう。

日時 九月七日(日)午後六時

場所 光明寺 (電話九二六〇)

大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前

(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

兼題 「世間」 三題 麻生路郎選

「泣き顔」 三題 清水白柳子選

「改札」 三題 川村好郎選

「口ぐせ」 三題 小川恒明選

席題 三題(当日発表) 戸田古方

呈賞 ☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞

会費 五拾円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂・

与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・永断・一三夫

★ 投句だけの方は郵券三十円

同封(切毎月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電話住吉 六〇八一番

朝見鏡

なんば発

- ① 8.15 ② 11.45
- ③ 14.15 ④ 18.10

観潮クーポン

お楽な日帰りコース 750円
観潮と淡路島周遊 900円

南海電車

お問い合わせ 南海交通社 電話 103,8081 60,5038

みんなが着て
みんなに
喜ばれている

倉敷
ビニロン
学生服

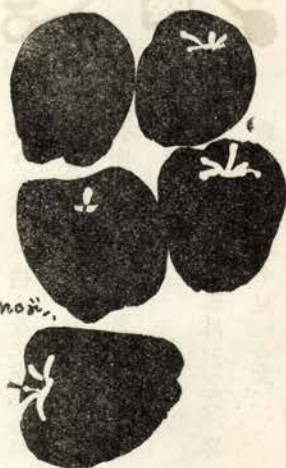
学生服用として特
別につくられた丈
夫で着心地のよい
ビニロンが使つて
あります



文部省・通産省推奨の純国産合成繊維

倉敷レイヨン株式会社

窓 口 談 義



川柳忌を前にして——ば
かばかしい話だが私は知らぬことが多い。視野は狭いし、未知の世界は広い。これなら知っていると言い切れるものが一つもない。その昔、南北が芝居のことなら

ワシに聞けと云った時、百樹が質問を發したら、「ウン、それは」と一問で詰まってしまう。自分の畑だと自負していてもこれである。南北のことだから「ヒヤー」と奇声を發して、誤

魔化してしまったが、普通人で、こんな偉そうな口を利こうものなら引つ込みがつかぬところである。以前、私は植物痴といふことを書いた時にも云ったように、木への字はかなり沢山知っているが、山へ行って、これは何の木やと訊かれたら、たちどころにグツと詰まる口である。それを木材にしたら、モ一つ判らなくなってしまう。おかしい話だが私はその程度の知識しか持合せていないのだ。私の未知の世界は実

に広い。あれも知らん、これも知らんである。だから、物に接するたびに、私の心は驚異と感激に震うのである。私は日々が勉強であり、一生が勉強であると思っている。そこで想像力や推理力をフルに働かすことに努力して創作の世界への飛躍を今なお夢みている。思想が凍結したり、詩句の迫真力が稀薄になったりしてはおしまいである。詩人の化石は売物にならない。

(路郎)

不 朽 洞 句 帖

麻 生 路 郎

愛情も電話をせぬと来ぬ程度

彼の天分は放埒に沁じみ出た

老人の日だが放つとかされている

いま気がついたよに 街を静かに

夫唱婦隨婦唱夫隨で 不足なく

僕等にはお盆に帰えるところもなく

脱稿近し疊のでこぼこ

一九五八年・九月

九 月 号 目 次

題 字……………麻生路郎
表 紙……………野尻弘

川柳忌を前にして……………麻生路郎(三)

春巢・古方対談……………北川春巢(一〇)

川柳歳時記……………木谷竹莊(一九)

新川柳鑑賞……………麻生路郎(二二)

アメリカ旅行の句……………河村日滿(二三)

柳風三國志……………東野大八(二七)

川柳と私……………木村水堂(二八)

梶原景時・景季……………富士野鞍馬(二六)

薄頭漫語……………西川晃(三〇)

須崎豆秋論……………高鷲亜鈍(三四)

女流作家に与う……………麻生霞乃(三六)

古川柳研究界の現状……………山路閑古(三八)

新人旧人の入選句数……………河相すむ(四〇)

老境と若いひと……………品川陣居(四二)

不朽洞の人々……………多久志氏の巻(四九)

川柳の壁……………宗高矢寸志(三一)

暗中模索時代……………万代句念坊(三四)

天下の險を越える句……………不二田三天(三五)

不朽洞句帖……………麻生路郎(三)

川柳塔……………麻生路郎選(四)

同舟近詠……………諸家(九)

近作柳櫛……………麻生路郎選(二〇)

一路集〔救え子〕……………富田不二選(二六)

〔指輪〕……………河村日滿選(二七)

各地柳壇集……………麻生霞乃選(四四)

入門講座……………(四)

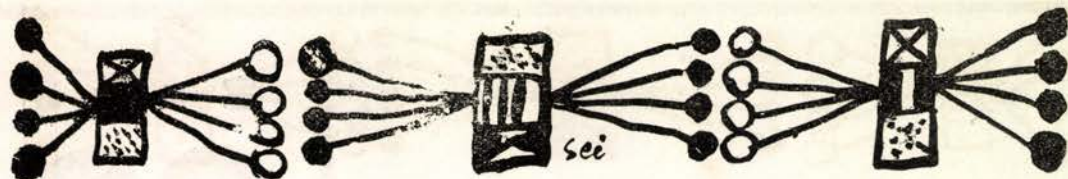
研究題「値切る」……………戸田古方(三三)

私の作句法……………土井文蝶(三六)

不朽洞会から……………小西無鬼(三九)

柳界展望……………(三八)

青ペン・赤ペン……………(四六)



兵庫県 戸倉 普天

土足のまま飼うてあがるも留守の事

夏薄衣腕のホウツもあざやかに

豊中市 戸田 古方

川向いの簾に風力感じたり

カンテラが船でうごいた浜通り

西宮市 若本 多久志

自己紹介会長やったことも言い

大臣と同じ病気で睨目し

きつちりしたはるとこは元大家

料理の友封も切らずに倦怠期

米子市 三鴨 美笑

長々と臥ると皆んなに忘れられ

水泳に母は先生だけ頼り

お座敷の酒は裸で飲んでおり

大阪市 正本 水客

奥さんの気安さ風呂から受け答え

靴穿く間立って見送る女にて

大阪市 丸尾 潮花

振袖はカラーで撮りたい母の欲

兵庫県 小西 無鬼

僕が言えば小言になるから控えとく

停年へちときつ過ぎた檜山考

うた唄うだけで家建て自動車購い

御近所の義理は不満なものも買ひ

大阪市 西 いわを

表向き未亡人として暮し

連れ出した女房方角には音痴

功成りて天寿全うされもせず

ホノルル市 内藤 草一郎

豪語してさて出すとなりや出すとなりや

営業用の年は五ツも若く言い

オートメーション涙かむ暇も無かりけり

親の目に紅を塗ろうがまだ子供

大阪市 大坂 形水

愈々肥満主婦の貫祿

東京都 宮田 不二

知り抜いた人生涙もろくなり

笑うべきところをすまして都会の娘

人通らない交番の灯がまぶし

ガサゴソは強盗でない鳥の籠

ホノルル市 白砂 旋風

十一のママ男とはヒドイことをする

今日からは兄弟だよとキストが止み

金と暇ニホン文化にチョッと惚れ

大阪市 須崎 豆秋

もう少し禿げんと課長にはなれず

蠅ばかり追ってるひまな天ぶら屋

イヤリングいやよいやよと揺れている

酔えまへん深水描く美人では

ホノルル市 羽佐間 柳葉

嘘ばれて女は媚を押しつける

人気者嘘を上手に使い分け

貧すれば私生活まで覗かれる

堺市 吉田 圭井堂

せつがちが青まで待てる歳となり

自宅から化粧して出る程にすれ

宇部市 国弘 半休

庭一つにおいて生活の裏表

真先に環境衛生の手を汚し

岡山県 直原 七面山

貞操の危機へ胃擦摩が起き

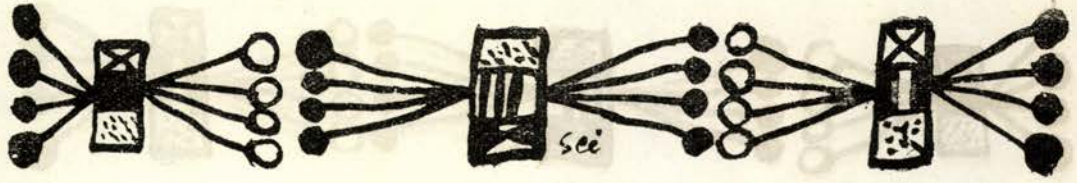
病床の妻に握手を求められ

映画檜山節考を見て

檜山は雪雪はおりの死化粧

鳥取市 河村 日満

岸内閣誕生



組閣完了汚職は公約から外し

ぬけぬけと舎弟も連れて坐る椅子

金持の面子がたてば出せる金

懲戒解雇かくて男女のいくたり目

大阪市 安岡 珊枝郎

祇 園

厚化粧自信に充ちた歩き振り

倉敷市 田 垣 方 大

パチンコへ無我なり撰氏三十五

見られるとらしいと思う娘の歩幅

市とは名ばかり船底の橋があり

お値段をあげれば売れる邸宅地

加賀市 野 村 味 平

仲よしのまんまで恋が果てるなら

ランデヴーには夏山けわしすぎ

一人来て一人は淋し慕まいり

大阪市 木 村 水 堂

暴力より恐いとおもう多数決

娘に意見したら時代が違います

母 死 去

子の縁にうすく養子を頼り切り

高槻市 福 田 丁 路

手をつけぬ誓い空しき置薬

心眼の鋭さに手も足も出ず

三拜九拝しても甲斐なき差押え

大阪市 真 鍋 一 瓢

お帰りなさいませから後のぞんざいさ

金で買うといいて会長しんどがり

大阪市 佐 野 白 水

入院の母へおちようだいして見せる

仏壇を開けて先祖へテレビ見せ

大阪市 後 藤 梅 志

踏切りに咲く日まわりは揺れにゆれ

識らずしらず人間に言うおべんちゃら

憶えのいい女弟子から先きにする

米子市 小 西 雄 々

ヒップだけ去年の田植よりめだち

商魂の芽を映倫につみとられ

大阪市 吾 郷 玲 人

良い夢を破った妻を叱りつけ

新型はボタンが一つ殖えただけ

親方はラムネにしとくチンドン屋

大阪市 山 川 阿 茶

二つちがいけんかにもよしうまも合い

三号が出来たで二号自殺する

狭き門くぐってハンスまで習い

大阪市 金 井 文 秋

差引はストもあんまり徳でなし

通知票子供があればこそ楽し

防府市 長 野 井 蛙

食堂のテレビはうどんの客で占め

集金と番犬見分けしてくれず

殺し文句だけでは女乗ってこず

金包判ればよいとボスが折れ

加賀市 那 谷 光 郎

ドライとは見えぬ振袖舞扇

新世帯まだ神仏の手は借りず

酒飲まずたばこも喫わず貯めて居ず

大阪市 北 川 春 巢

避暑代り捕物帖を読みふけり

一言もしゃべらず懇談会はすみ

祭り用にと酒屋さん御親切

下関市 桜 川 不 水

神様は酒の喧嘩をおあわれみ

女房を張り飛ばしたと言う男

岡山県 浜 田 久 米 雄

みそ汁で男世帯が軽くすみ

年寄りが年令を見ている定期券

女が少し多い人口をうれしがり

大阪市 武 部 香 林

風鈴を贈られ風の無い日なり

もう寝よと蚊帳の吊手にささやかれ



敷きのしの重しとなっただけで暮れ

尾崎市 小林文月

漁村出の彼女に涙でひけをとり

無心扶暑中見舞と別に出し

東京都 山根白星

恋知りそめて小走りの癖

東京の恋を許した父の老い

右往左往髪髪霜を置いてまで

大阪市 富岡淡舟

経験で押せば上司は不満なり

神よ憫み給え古本屋に聖書

夜の廊下義足が通ればスリラーめき

呉市 林野甦光

文盲の父の小言もうなずける

鼻の差で負けても馬の値が下がり

カクテルの味を女は知っていた

岡山县 福島鉄児

ヘクター子供に聞いて見る広さ

お隣りの儲けを予想するも妻

岡山市 服部十九平

賽銭を忘れて鳥居から拝み

戦友が勝って来るぞをまだ欲い

熊本県 有働芳仙

ハイお土産裕ちゃんのブローマイド

ショー終りヤール百円のに着替え

屋裏中のババをママと子と跨ぎ

潮満ち満ちたり心ゆたけし

大阪市 山本葉光

耐え忍び日記にこまごま書いて寝る

本職はどちらと訊きたい程の余技

倉敷市 水谷谷水

妻の目をもう税務吏は読んでいた

タイ締めてもとの職場を潤歩せん

老社員哀れ仲居にまで媚びて

裕次郎タイプで末が案じられ

飲みすぎだそうだと弔慰金寄せに来て

頂だかぬ主義で課長さん恐がられ

岡山县 田村藤波

思いようとりよう保険かけつつけ

押入れに入れられた事もある学士

妾と金魚どちらが大事な

岡山县 岡田夜潮

被害者へ母も頑としてあやまらず

一生をオイコラハイで終りたる

大阪市 稲葉鳩花

金魚にも聞いてお呉れと二号ひま

妻の愚痴聞かされている弱身もち

朝刊を晩に見ている共稼ぎ

茨木市 下山清潮

行末は氣にしな金を貯めときな

岡山县 本田恵二期

チップの効目がまた来てねまた来てね

隣りまで行くに靴べら持って来い

京都市 松川杜的

扇風機母の席には届きかね

廻転椅子それから酒量ちと上り

すねているアベックもいた中之島

鳥取市 森本法泉子

家を売る噂当主は病み続け

保険屋が呉れる扇子を待っている

尾崎市 藤井春日

望遠鏡お城とらえた児の叫び

高級車中で小兵のそり返り

目分量ピッチリ来たど仕立職

岡山市 津田麦太楼

定命に障る後妻を貰らわされ

水ききん版画のようなダムの底

堺市 高崎雄声

蚊や蠅が居なくなつたで失業し

壮厳な家だが蟻や蚊に困り

鳥取県 藤井明朗

客を待つ父を残して祭に出



孝行の美談十代ピンと来ず

岡山県 永松 東岸

所もあろうにつり皮へ足袋の広告

お祭りの雑踏鳩は忘れられ

倉敷市 野田 素身郎

寝ていても多弁な女口をあけ

旅三日枕の高さにも慣れる

大阪市 伊達 堰子

山下清展

小便にサインの画伯ブイと立ち

大阪市 不二田 一三夫

若夫婦どちらもチャンをつけて呼び

闘病へせめてふとんの柄を変え

宇部市 津秋 六花

門衛のひげへ思わず頭を下げる

其の意気その意気不浄の金を突き返し

ハハア赤線に居たなと思う宿の酌

神戸市 野村 初甫

火をつけてから花火女の子に持たし

虫干へお米と変えた話とする

樹の手で明日の弁当きいてみる

岡山県 戸田 喜楽

旅疲れ見知らぬ女ともたれ合い

死ぬ生きる言うてるうちに女老け

唐津市 新潟 回天子

落着かぬ父失職の話なり

岡山県 池田 古心

不運なる印なり金を借るだけに

東京都 石居 高志

映画暖簾を覗て

ぎこちない気持でのれん子に譲り

商魂はこぶを握ったまま薨れ

松江市 勝谷 山川 児

リクレーション小使さんもカメラ持ち

陳情に扇子を持たぬのも涙り

日本の平和を朝の宿から見

大阪府 早川 清生

レジスターだけ灯がともる喫茶店

愛されて父が鮮人だと言えず

八百屋の暗算みんな割り切れ

相撲実況すんで銭湯ちよつと泥み

トイレから見れば隣りも連れ込み屋

模範囚過去を問われることに馴れ

堺市 辻 圭水

注意した医者が同じ病で倒れ

大入りが逃げてしまった俄雨

加賀市 中 松岡恒 雄

講演の又アメリカを例にひき

テレビまで持って嫁かせて早や戻り

茶菓子まで出すのでテレビ見に行けず

大阪市 児島与 呂志

サックドレスお目出たですかとたずねられ

扇風機蚊帳のうちらへ引き込まれ

岡山県 野々口 美舟

義理と言う二字へ結んだままの口

西宮市 小浜 牧人

少年のやくざ口調にどきりとし

歌手志望ならず美声をバスガイド

半どんの受付にべもなく帰えし

ナイターで会った課長も下駄履いて

西宮市 菱田 満秋

片輪にはなったけど病院よさようなら

兵庫県 前川 左文字

元金は依然と胡座をかいており

美しうて旅は道連れともいかず

サンガラス外せばただのお坊ちゃん

岡山県 池上 知恵美

農薬で死にそこのうた虫が鳴き

大阪市 橋高 薫風子

息抜いたところが師匠には判り

朝露の感触を知らぬ義足なり

力士いま自分の汗の上に這い

日銀は誰が這入ってゆくでなく

下関市 中村 九呂平

はつきりと言う娘を母はあぶながら



しくじりがあって机の位置を替え

米子市 石坂新雪

結構なつる大臣まで見て呉れる

自転車もスピード制限するつかれ

大阪市 西川 晃

呵々大笑署長室からボスの顔

琴線に触れて言葉はもう要らず

釜ヶ崎

十字架がおかまの胸に垂れ下がる

血みどろの喧嘩の因が二拾円

鳥取県 田中蛙眠子

かわらぬことにした背をどやされた

鉢巻をすれば先生もおっさんや

道後山にて

バンガローの霧へ跳足で米洗う

名古屋市 野田一念

借着してまで女ゆきたがり

共稼ぎなれば御免と言う見合

岡山市 林 葵丘

月末の算盤亭主の前で入れ

太陽へ百姓すなおに感謝して

神戸市 仲どんたく

終電車ダンサー己が齢を見せ

血だなあと我が子のしぐさながめ入り

平田市 久家代仕男

利子つかぬ支払いだからほっとかれ

貧乏をしても花を活けたがり

大阪市 本多省三

一票を言い出しそうな無料バス

特価品選るのに邪魔なイヤリング

エプロンもシャツもまつりという白さ

大阪市 大谷月都

自家用で来たと思えば運転手

温泉旅行

吾れ乍らよく喰べられると思う旅

長旅に紳士の仮面脱ぎ捨て

岡山市 江国幽谷

宿題はテレビの前でいたします

裕ちゃんの写真を内の娘も集め

岡山市 光好陽子

変こつにお世辞を言うで怒鳴られた

尼崎市 徳永鬼美

大掃除も楽しステテコアップパ

洗濯機粗品と書いて運ばれる

ボーナスをワンと言いたいほど待たせ

扇風機壱万円の風が吹き

西宮市 河相すゝむ

置き忘れて妻にがみがみ言うも年

残業を部長それでも手伝う気

西宮市 野呂鶯汀

生きようとすれば家名が邪魔になり

池の鯉己が住いと思ひこみ

派出所が建って飲み屋の客が減り

西宮市 樋口舟遊

奥さんと呼ばば鯛をも買いよった

きぬこしの仕込みをへらす黒い雲

新潟県 高野むじな

キスしてほしい用件だと見抜き

金貸してやってくれる方が使われる

高槻市 辻白溪子

都会の子メダカ如きに気を引かれ

金閣寺にて

金閣寺の影を素して鯉がはね

高砂市 吉原紅月

井戸水の冷えを都会で恋しがり

浪曲が好き保守党の肩を持ち

大阪市 竹内千里

積極に出られ浮気の興が冷め

見くびっていた職業についていた

大阪市 欄 蘭

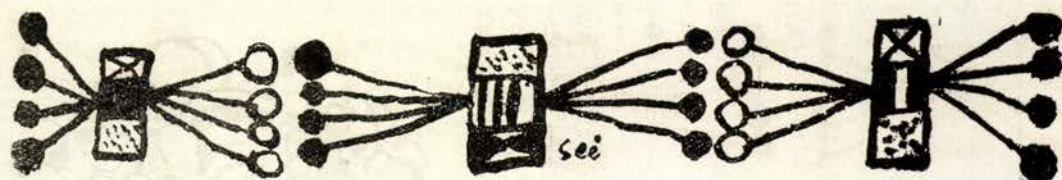
盆に来て正月の話して帰り

鏡見てニククネームに感心し

大阪市 石倉旅風

横綱の悲哀横綱になって知り

岩壁に名優のごと起ち叫び



大阪市 魚住満潮

不景気を坊サンまでがかこつなり

死土産町会議員に打って出る

最後までついて来たのは妻一人

堺市 田中狂二

未亡人仲には喜んで夕涼み

八頭身夏と言うのに風邪をひき

大阪府 林昌男

もの好きな女だまってついて来る

ハイボール重ねて好きとまだ言えず

愛媛県 村上旭童

電燈へ甲虫とは豪勢な

しりもちをついて笑うた歩きぞめ

倉吉市 大前鳴悦

海水着座敷で試す娘のボーズ

キスシーン呆れてたたむ老眼鏡

鳥取市 北村三歩

意外にも左翼へ妻の顔がきき

実力の世界課長は黒を持ち

神戸市 傍島静馬

特価品のように食堂よくはやり

親の柄着でいて迷い子すぐ判り

人形でも買おうかと思うゆとり出来

逢いに行く車はおそいものと知り

大津市 杉原吟女

サイクリング山もたんぼも空も青

呑めるとはちと言ひ難し女連れ

○

静養中の私にとって、「川柳塔」の選はなか

なかの負担である。しかし諸君が懸命に詠まれ

た作品だと思えば一句でも見のがす訳にはいか

ない。そのためには諸君も一句にいのちをかけた

て欲しい。作家は作品を大事にしなければいけ

ない。でなければ選者も又、それ等の句を尊重

しないだろう。しかし「川柳塔」の一句が諸君

の血の一滴だとすれば選者としても大事にしな

い訳にはいかない筈だ。

(略郎)

同舟近詠

松山市 前田伍健

走馬灯先生父兄子と教委

整形をせよから不和になり給い

岸さんの自信漫画の歯を見せる

サンガラス人相いよいよ悪くなり

大阪市 橋本緑雨

おじちゃんにしてつき合う酒をつぎ

年頃に詩ばかりこって病みつづけ

須坂市 高峰柳児

役得かテレビアンテナ聳えさせ

善人で居て肝心の金がなし

くだを巻く末席お女将任せられ

病人の闘志蠅叩きを構え

借金が減って汗を尊とがり

和歌山市 秋月宏方

入荷とはちと大きな小売店

短大を出て腰かじりまだ続け

植字工異説立ててるなと思ひ

飼い主の家計は知らず秋田犬

大阪市 石田沐天

芸術の一つに臍々々の列

ロカビリーも児童の一つさ夜の女王

事務的に喰ってキスして共稼ぎ

やったりな筋金入りの汚職ぶり

今治市 長野文庫

靴下は赤だが思想色もなし

裕次郎下宿の壁で色が褪せ

原色を着て居て智能疑われ

今治市 月原宵明

コーモリを張りつけたよなサンガラス

愛人にうれしく砂で埋められ

孝行を金するのがよく目立ち

陽まわりを大きく咲かし農家留守

上田市 金子吞風

遅刻して来たのが降ってきたと言う

眠気の中のアドバルンの円さ

煙草の輪女の前身を描き



春巢 古方 對 談

——近作柳樹と入門講座について——

北川春巢——古方さんと対談という事になってゐるのですが。

戸田古方——先輩の春巢さんから対談の糸口を引きだしていただきますしょう。

春巢——川柳はいささか私のほうが先輩ですが、高等学校では古方さんのほうが先輩ですよ。

古方——同じ大高の卒業生とは奇縁でしたね。

春巢——奇縁柳縁というところで。私は昭和九年卒業ですが、たしか古方さんは五年先輩でしたね。

古方——そうですね、私は昭和四年卒業です。川柳は昭和十三年に始めました。中島生々庵医博のご紹介で、当時路郎先生が松坂屋で川柳の指導をされているとき連れていったらいました。私の父

は洒落のきく人でしたが、私はそのほうはカラッキシ、ダメなので川柳は作れないと思ひこんでいましたが、路郎先生が提唱される——社会批判、人生批判、人間陶冶——ということばに共鳴して初出席したところ、幸運にも二、三句抜けてまして、それが病みつきとなって今日におよびました。

春巢——私の川柳は昭和五年ごろでした。いまの国電が汽車（城東線）だったころ、当時、大阪医大の学生でしたが岩波文庫の柳多留の古句に心をひかれよく車中で読んだものでした。大ビルの書店で「川柳雑誌」を初めて見ました、そうですね、昭和八年の終りと記憶しています。古句ばかり読んでいた私が、この新川柳に

よってこんどは自分で作ってみたくなったのです。阪大には医博長崎柳秀先生がおられ、阪大川柳会の中心人物でした。試験問題にも川柳が出るという川柳医博でもありました。この阪大川柳会を指導されていたのはいうまでもなく麻生路郎先生でしたので、入会したかったのですが、学生はダメだと断わられました（笑）

古方——で、どうしました。

春巢——仕方がないので卒業まで待ちました。だから路郎先生のお顔はまだ拝見できなかったわけです。そのころ阪大へ故食満南北氏が入院しておられ、その退院祝賀句会が病院内で催された時、君も出句してみないかとクラスメートの八竹正柳君（現在大阪警察病院・内科医長）からすすめられ、そこで一句か二句抜けて、いよいよ川柳がおもしろくなってきたのです。南北氏から腕を磨くには句会へ出るようにと教えられたので番傘などへ出席しました。昭和十年ごろでした。そして昭和十二年、阪大を卒業したので、待望久しかった阪大川柳会へ入会させていただき、その月の句会の題が、春巢の一字をとって「巢」というのでした。感激しましたね。しかも選者は路郎先生なのですからね。

古方——天に抜きましたか。

春巢——いや辛うじて平抜きでした。（笑）

古方——松坂屋クラブ初出席のときの題は「小児科」でした。句会ではなく指導が主でしたので小人数でしたが、毛筆で句を一句だけ書いて、先生の机の前へキチンと正座して先生のご批評をうかがうのです。「なんだねえこの句は——」と先生からお叱りをうけるのが怖くて、怖くつて。（笑）

春巢——その指導法を、入門講座でやられたらどうですか（笑）

古方——イヤこりゃどうも。

（笑）そのころは句会へ出れば上達すると思つて、どこの句会へでも出席しました。ある時、堀口塊人氏の昭和川柳会からの帰途、心斎橋で路郎、葎乃両先生にお会いしまして、あまりほうほうの句会

習慣性のない

催眠剤

イソミン錠
大日本薬業

イソミン錠

12錠 150円・30錠 300円



へ行くと、みんな主張がちがうので句が荒れるということを経路先生から教えられ、その日からブツリ他社の句会へは出なくなり、今日まで二十年間川柳一本でまいりました。

春巢——私も阪大卒業後川柳オンリーです。いま古方さんが話された松坂屋クラブの句会のあり方、阪大川柳会のほうもよそとちよつと違ったやり方をしております。句会の何日か以前に兼題を切つて、その集句を順不同無記名でプリントにし、句会の前日ぐらいに、各会員に配るのです。勿論先生のところへも送ります。ちよつと俳句会の運座のように、各会員がその中から選をしておきます。選をしておかなくてもよいのですが、句会の当日に、先生が見えて番号によって、何番と何番という具合に入選句を発表されます。俳句の運座とは違って各会員が選したのは発表しません。当日はただ先生の選だけが発表されるのですが、幹事には何番が誰の句と名前がわかってるので、そこで作者名を発表します。だから私は阪大川柳会へ入会の当初からそんなふうに通の練習をさせていたのだいけです。勿論各会員が抜いた句と、先生が抜かれた句とは、だいぶん違います。そこで選の練習になるわけです。席題のほうはよそと同じで、句箋へ書いて

無記名で投句する。これは一般と同じです。兼題も席題も全部先生に選をさせていただいております。これは有難いことでした。まじり気なしの句が生れますしね。

古方——Aで没になったがBで抜けた、こういうやり方をしていると個性のある句が何年経つても作れません。

春巢——以前、職域見学で某市へ行ったとき、某社の句会へ出席したことが句が抜けない。句がダメになったのかナと、ちよつとさびしい気がしましたが、川柳備前支部へ行ったときはドンン句が抜ける。あてこみをしないと個性が生きているのですね。

古方——大高在学中、小出橋重画伯から、絵より何もできない者が絵と取り組めといわれました。つまり川柳より何もできない人が川柳と取り組む。こういう人が作家になるのでしょうか。やはりそれには「根気よく」「ねばり」が要求されますが、そこに本当のものがつかめるでしょう。本社句会でときどき句評をおおせつかりますが気がつかれます。理想としては、入門講座も松坂屋クラブのような指導方針をとりたいたいのですが、大勢の人から句が集ってくるので、一人でも多く句なり名前を活字にしてあげたいという気の弱さがあります……。

春巢——その気持わかりますよ。近作柳柳の全役が多いということを開かされるたびに、せめて一句だけでも抜いてあげたいという弱気がでます。が、しかし、それは選者としてはできない。あ

る人がらこういうことを聞きまし

た。私が没にした柳箋から先生が何と私に一句でも抜こうとされたそうですがやはりどうしてか抜く句がなかったと言われたそうです。それを聞いて私の選にまちがいがなかった事を知りホッとしたことがありました。いくら先生がもう一度見てくださるからといって、佳句を見落したり、拙い句を抜いたりすると、一般投句者にも相すまぬことになりましたからまったく気がつかれます。それに入門講座とちがって柳歴二、三十年という人がザラにいますからね。こちらも必死ですよ。

古方——入門講座のほうにも相

当の柳歴のある人もおられますよ。

春巢——相当の柳歴があつて、入門講座で作句指導をしてもらうというのはどうしたことでしょう。か。

古方——だから一句だけとり上げてそれを掘り下げていくことがよいとわかっていながら、つい総花式になってしまうのです。路郎先生からもこの点よくお叱りをうけるのですが、これからはそういう方向へもって行くよう努力したいと思つています。

春巢——近作柳柳の選をお手伝いさせていただくようになって、もう四年になりますが、始めのころはビクビクものでした。現在もそうですが選をする前、「旅人」を静かに読んで雑念をはらいのけ、句境にときこんでから、おもむ

に選をすることにしていきます。

古方——私もそうです。「旅人」はだから一日もはなせないわけです。路郎先生は実に良い句集を出してくださいました。柳界の聖書ですね。

春巢——乱暴な文字や、うすい鉛筆の走り書には困りますね、糸へんも、さんずいへんも、ぎょうにんべんも同じように略す人がいますが、これは注意してほしいものです。日ごろから週刊誌や新聞で、流行語をよく研究しておりますが、それでもわからぬモノにぶつかる。そんな時は若い看護婦や、若い医務局の人にたずねて万全を期すことにしています。

あなたの生活にプラス
近鉄のお買物



アベノ・上六
近鉄
アベノ店 8331
上六店 3131



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔五五七〕

立呑みてソースのついた名刺くれ
(豆 秋)

庶民的な立呑みで、呑むほどにだんだん口が軽くなる。ツイ隣りの男とも口を利く。コイツ話せるなアと思うとソロソロ名刺の交換がはじまる。

それは平凡な情景に過ぎないが、この句のヤマは中七の「ソースのついた」である。もう既にだいがまわっていることがうかがえて面白い。

〔五五八〕

襟死には虚空を掴む暇もなし
(夜 潮)

襟死があったと聞いただけでも暗らい感じがするのには襟

うけるようになったのである。

鉢巻をしてデモッている姿の先生に教育者としての敬意が払えないとすれば安っぽく見えるのが当然であろう。

〔五六〇〕

何をたく煙か我家見えはじめ
(旭 童)

そろそろ黄昏れて来たので家路をたどる農人の姿が思われる。

遙かに自分の家が見え、その家の棟から、何を炊く煙かしらんがゆらゆらと煙が立ちのぼっているのが見え、何んとなく身内に温たかさを感じたのである。田園風景の叙情詩として捨てがたい。

〔五六一〕

家族湯へ大阪からの電話です
(形 水)

大阪というところは、働らきもするが遊びもする。温泉という温泉が大阪人のお蔭で息をしているようにも思える。この句大阪人の発展をうまくキャッチしていると思

なこともあるあります。しかし自信をもって選をしている以上、そういう心配はしなくてもよいのですが、背景のことが「バック」手提げ鞆も「バック」というように、作者と

スートで
着心地のよい

O.S.K.
レディマード

株式会社 大坂商店
大阪市東区平野町一丁目二番地
電話 東(94) 1745・1563番

選者の「訴え方」と「受けとり方」にまぎらわしい言葉もありますからね。路郎先生が常に申されているようにそんな時には「やまとことば」であらわせばそういう複雑さはなくなるのです。

春巢——近作柳櫛の選をお手伝いしてから先生の今日までのご苦労が身にしみてわかりました。こうしたお仕事は何十年間も続けてこられたのですからね、大事業ですよ。古方さんが言われたように、誤選は絶対せぬようにしなければなりません。野球のアンパイヤー、相撲の行司のように、一瞬同時というケースもあることだと思います。しかもそれが同時だからといって、今のは同時だからわからなくてはいけません。どっちかにアウト、セーフ、あるいは勝ち負けを宣告せねばならない。入選と没の差がアウトかセーフかギリギリの場合もあるでしょう。だから文句なしに入選するような佳句なら誤選もしないということになるのではないのでしょうか。

古方——相撲や野球なら抗議という手段がありますが、川柳の場合は選者絶対ですから、選者たるもの責任重大ですね。

春巢——同感です。

古方——葉屋さんの広告に、これはキャッチ・フレーズですが(最後の敵ーガン)というのがあります。人間最後の敵はガンだとする広告でしょうが、無敵艦隊が勝つためしがない。スペインの無敵艦隊が負けた。日本の無敵艦隊が負けたとき、私は無敵艦隊というキャッチ・フレーズに、日本が負ける予感がありました。こういう大げさな表現は、川柳の上でやってもいいくないと思います。

春巢——川柳は広告ではないから用語にはよほど注意をしないと

う。家族湯に浸っていても、大阪から取引上の電話がかかって来るほどの抜け目のない活躍振りである。

〔五六一〕

四十年の勤続髪も捧げたり

(麦太楼)

勤続四十年、いつのまにか歳月は流れた。停年としてしりぞいても何等悔いはない筈だが、一沫の淋しさがなくもない。房々とあつた頭髪も今は薄く、真っ白くなっている。これでよいのかも知れぬが矢張り淋しい心に変りはないという老サラリーマンの心境を巧く描出している。

〔五六二〕

こんどめはニューモードなる袋着て

(沐天)

フランス仕込みや、そうでもないのも交じえてのデザイナーが次ぎに、ニューモードなるものを世の中へ送り出すが、それを若い女性たちは憶面もなく着て歩いているのである。

「こんどめは」どんなものか

と思つたら、サックドレスと称して、袋を着ているので、一驚を喫したのである。

「袋着て」の下五に作者の皮肉が横溢している。

〔五六四〕

予備校の広告落第待つ如し

(草右)

白線浪人の眼を射るものは予備校の広告であるが、その広告を読むと予備校は入試地獄ですべるのを待つてゐるようであるというのである。

皮肉でもあり、滑稽である。この句の面白さは「落第待つ如し」という表現の巧みに外ならない。

〔五六五〕

俗名をとどめて薬瓶しずか

(不二)

薬石効なくという訳である。まだそこには薬瓶がしずかに卓の上に残っている。しかも薬瓶には在りし日を物語るかのように俗名が読まれるのである。

人正の終焉が、斯うした静さで迫って来ることは堪え

難い淋しさである。

〔五六七〕

スビツにはよくしゃべる口持つていて

(若菜)

あの奥さん、いつ会つても、ムチツとしていて、チツとも口をきかない、いかにもそんだいに構えている。スビツには何んとか、かんと

か、よくしゃべる口を持つていくくせに、人を莫迦にしてるんだわというのである。スビツ以下に扱われているという劣等感を巧みに描いている。

〔五六八〕

困われたままで小鳥の様に死に

(薰風子)

二号夫人も、困われて幾歳月となると、平々凡々たる日が過ぎるに過ぎない。

寵愛せられたあの頃の甘さも、色褪せた花のように何んの変哲もないものとなって散ってゆくのである。その死を鳥籠のせまい天地で死んでゆく小鳥の姿にたとえたところに哀れな美しさがある。

古方——川柳することによって日本人のことはよくするように心がけてほしいものです。

春果——美辞麗句は不用だと思ひますが、日常使っていることはを使うのが一番よいのではないのでしょうか。

古方——美文調はよほどうまくやらないと失敗しますね。

春果——よく若い人たちがきかれるのですが、どういう句を作つたらいけないのか、と。道徳に反することや「末摘花」のようなエロは勿論ですが……。

古方——問題になるのはそのエロですね。「チャタレー夫人」の場合のように、芸術かエロかということになりましたが、そこに道徳と真実がなければなりません。といってそれが説教になつてはダメなんです。真実と真理がなければいけないと思ひます。作句する人は、真実へ合掌礼拝する気持ちをもって

ほしいと思うのです。そこにはかならず美しい詩があり、芸術があると信じています。

春果——路

郎先生が提唱される(人間陶治)という金言はここに

あるのですが、いま「チャタレー夫人」の話がでましたが、あれを川柳で詠むと、結局は「末摘花」のような句になる危険性があるように思われますね。

古方——同感です。

春果——自分の身近かにおこるものを川柳にすることは、それ自体ウツがないから選者の胸をうつことになります。近作柳樽の場合、投句規定が二十句以内となつていますが、ムリに二十句にしているらしい人もあり、又は五、六十句も作つて、そこから作者自身で二十句に選りてくるらしい人もありますがこれは選者にはすぐわかりません。こういう人の句には真実がこもっているの、やはり抜ける数も多いわけです。もうスペースもないようですが入門講座での健闘を祈ります。

古方——ありがとうございます。(文責・不二田一三夫)

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



高島屋
大阪・東京・京都
3店に共通です



須崎豆秋論

——或は詩川柳に於けるディオニソス——

高 鷲 亞 鈍

豆秋のドライ性

昭和廿九年十一月初版を出した名句集「ふるさと」の序文に著者の師麻生路郎氏から、「古くから柳壇の一茶と云われてはいるが………」とある通り須崎豆秋は、「川柳雑誌」路郎門下の逸才であり、のみならず全柳界の一茶といわれる鬼才であることは、既に承知済みである。

この有名作家を私は取上げて、私の現代川柳論を展開しようと考えたのは決して今始まったばかりの思いつきではなかった。それは昭和十六年二月号から三回連載した「奥村丹路論」に継いで「須崎豆秋論」を私の柳論の課題として約束されていたからであった。その当時から、私一人だけの考えではあったにしても丹路と豆秋はその作風が対照的であり、その作品によってう

かがい知る限りでは個性が甚だきわだつていたこと。そのころの「川柳雑誌」の双壁として佳品の少くなかった名作家であったからである。

これは点着麻生路郎師の炯眼であると、やはり思われる。丹路は今、泣かず飛ばずの沈黙を守って惜しまれるが、然し路郎師の門下には、それぞれの個性を孕み育てられた作家は丹路、豆秋だけではないのは勿論である。私は五月号の「柳論は花嫁」で、川柳に於けるロマンチズムとリアリズムに一寸触れて置いたが、丹路と豆秋の作句態度はこの二つの文学主流に準さずイズムのチャムピオンと考えられる。軽く考えて豆秋の作品は如何にも川柳らしい川柳で、私の提唱する詩川柳のカテゴリからは極左的存在である。其故に極右的な作家奥村丹路論ほど私の食指が動かなかったの

も事実である。

しかし、私の詩川柳理論の根底にロマンチズムがあるとしても、それが主情の麗気楼に遊ぶものであつてはならない。少くとも私達は川柳を考える場合、川柳自体の散文性、具体性、客観性は絶対的なものであり、詩川柳たりとも、それら現実を無視することは出来ない。即ち豆秋の作品はやはり私の提唱する詩川柳には違ひはないが、丹路の主情性に対する客観性がより克つていふこと。又今の流行語で言えば丹路のウェットに対する豆秋のドライがロマ(註・1)

私は詩川柳を定義するのに作品以前に詩人を人間以前に詩人性を先天的条件とした。その意味に於て丹路も豆秋も詩人であつた。詩川柳を作るから詩人なのでなく、詩

人なるが故にたまたま詩川柳を創作したのである。その共通の場に立つ故か豆秋は丹路の人と作品を今尚激賞し、傾倒している。或は愚陀(故人)の「愛の言葉河童同志は泡となり」のフィクションに感嘆しているが、しかも豆秋自身の作品にはフィクションらしい作品は殆んどなく、寧ろ古川柳的な、庶民の人間生活をそのまま対象にした句が多い。或る意味では当世の川柳家の中に、川柳家らしい川柳家が句会などで見受けられないうちに、須崎豆秋ぐらいその風貌に於て行動に於て、又句会吟に目立った存在はない。一口に言つて、人も句も豆秋は如何にも川柳家らしい特異なしかも得難い存在であると、私は思っているのである。

(註・1) T・S・エリオットの「荒地」(ウェスト・ランド)詩論中に乾いた詩(ドライ・ポエム)を現代詩壇の一部が取上げ、詩のリアリズムを小野十三郎は「詩論」によって体系づけたが、戦後黒田三郎などの「荒地」グループが作品上にリアリズムを展開し詩の計算を図つたのに対し、小野は作品以前に詩を秩序づけ、抒情を割切ってしまったので、表面に出た作品は完全に乾し上つてしまつた。

川柳とか散文に孕むもの

川柳ということだけで考えたら、川柳は詩よりも小説的概念を包括している散文と

言えよう。其故に詩は時間的な縦の線であれば、小説は空間的な横の拡がりであるから、川柳は寧ろ空間的な横の拡がりをもつ

豆萩自身が気づくと気づかずとに拘らず、
極めて自然なフリースタイルであつたので
ある。

彼は川柳によつて救われた。と言つてゐるそうだが、私は寧ろ川柳が彼によつて救われたのではないかと思つてゐる。恐らく豆秋ほど、川柳そのものと言つてよい作家が他に居ないからである。彼の時事吟にしても、風物吟、写生吟、世俗人事吟、凡て彼の思念に入れば、通常人の及びもつかない川柳を発見する。例えば巷間、日常の会話の中からでも、彼が、十七字に詠めば立派に川柳となつてゐるという風に。豆秋の場合、川柳は川柳的な要素や作句表現上の生理的分秘物は、彼自身の汗や、大小便のように川柳を排泄する。

眞の意味に於ける川柳とは、凡そこういつた豆秋のような作家的態度をもつてして始めて存在するのではなからうか。川柳は庶民一人一人の關係にあつて、自然発生的に生れ出るものであるにしても、いつの世でも現實は矛盾と相剋と確執にいやらしい感情を孕んでいる。しかも表面人間族は阿呆のように無感動であり、或は蛇のように小賢しい奴は利己主義の穴に身をひそめて、さりげなく臭いものに蓋をするというのが、一般社会人の通念である。斯る時、人間内部のいやらしい一切をぶち撒き、平気で屁をひるスカンクの人間が居るとすれば、それは須崎豆秋であり、仮初めに十七

字の尻をひるなら、これはまぎれもない川柳でなくて何であろう。

矛盾と相剋と確執。それは小さくは嫁と姑にあれば、金持と貧乏人にある。大きくは為政者と民衆に、自然と人団族にとそれら二者の關係に於て川柳は存在する。川柳はそれら前者と後者の關係に介在する矛盾と確執の角突きあわす無秩序な散文で

あつて、豆萩自体が川柳ではない。豆萩といふ人間の吐き出す散文が川柳であるといふことである。ある作家は川柳は人間であるし、人間は川柳である。（註・一）と言つたが、これは早まった考え方である。勿論川柳を考え抜いた結論として出た言葉でその意味は判らないことはないが、川柳は必ずしも人間でもなければ、人間は川柳でもない。豆萩が川柳で救われた。私は逆に川柳は豆萩によつて救われたと言つたことは、川柳は人間であり、人間は川柳である。といった概念に通ずるものがあるが、私はここで断言したいのは、川柳は人間でなく散文である。と大呼したい。散文は具象であり、現実であり、客観である限り矛盾相剋と確執を孕んでいる。その限りに於ける具体的な人間存在も亦矛盾と相剋と確執を孕んでいる故に散文と言えないでもない。しかし散文は、他の立場との關係に於て成立する故に川柳たり得るが、人間は、一個の人間存在たり得る限りは他との關係

現実的な血みどろな生活はない。禪坊主のように悟り切った人間に俗世的な川柳的（散文的）關係は成立しないように。敢えて、言うなら、川柳は、庶民の声である。庶民とは人間生活を行う個々人の無目的的でバラバラの人間族をいうのであれば、庶民はそれ自体川柳とこそ言えるのである。（註・2）

私は豆秋の作品を川柳らしい川柳と言った。川柳が古川柳より現代川柳に及ぶ約二百年間、いずれにしろ川柳はその時代時代の庶民によって存在した。柳橋初篇の古川柳から始まって久良伎、剣花坊の新川柳になり、大正川柳、昭和川柳、本格川柳、革新川柳、近代川柳、現代川柳、詩川柳、寸詩、俳詩、短詩、社会詩、卓唱、といろいろあるが、そこに一貫したものは川柳が庶民性をもった文学であるということだ。そして私の川柳理論に於けるディクシヨン（術語）によれば川柳の散文性が伝承されてきたことである。豆秋の作品が、川柳らしい川柳というのは、その散文性が彼の好むと好まざるとにかかわらず多分に有るということであつた。しかも豆秋の場合、自然と人間、富有と貧困、有情と非情、強者と弱者、善と悪を必ず対立せしめて、その関係（矛盾、相剋、確執）を巧まず、銜さずさらにつと川柳している見事さは他に類をみないと私は信じている。

(註・1) 梶元紋太著「茶の間」昭和廿九年十一月刊「川柳は人間である」項

に、紋太氏は、「川柳は人間である」は一応割り切れた感じが致します。逆に「人間は川柳である。」——と冒頭に述べていた。そして、その説明を読むと、

「川柳は人間の全部を表わすもの。それは素っ裸な人間として、文学も川柳も知らない前の只の人間そのもの、ありのままの素直な人間（これは庶民の一員としての人間を、只の素直な人間と断って、人間性を限定している亜鈍註）その人間が自分の願望なり欲望までを、美も醜も構わずあけすけに曝け出す、それが土台です。——と言っている。これは紋太氏

の人間観は私の中註にある如く紋太氏自身素直な人間という人間を限定し、その人間の願望や欲望をあけすけに曝すのが土台である。ということは私の散文性が川柳の土台になっている。そして「自分と作品との間に何も介在していない、人間即ち作品と言える境地。」というのも主題の「川柳は人間である」を語る論理からはずれてしまっている。

（註・2）庶民とは大衆や民衆と区別したいと思う。私は庶民とは同一目的を持たず大衆や民衆のような共通の立場やワタを外した一般の人間が個々に生活する人々を一括して名称する。これから類推して川柳は庶民の声であると言えるが、限定された人間を捉えて、川柳は人間である、と定義つけたのは紋太氏の誤謬であった。

出版記念会の功罪

私は著者の処女出版がなされた時、その友人や縁故関係が発起した出版記念会には昔、よく出席したものだ。殊に処女詩集が上梓された記念会などでは、当の著者に喰ってかかるように、その作品をボロクソに貶し、その悪友どもは著者の人間性の棚卸しまですることが、芽出度く記念さる可き祝辞とされたものであった。東京などでも無名の詩人の出版記念会があれば、有名な詩人達も集まるのはよいが、掴み合いの喧嘩沙汰になるのも稀ではないが、それが却て盛大にして、名譽ある記念会として将来銘記されたものであった。

しかし私は川柳句集の出版記念会にも数回出席したが、川柳仲間が人間ができていくというか、或いは川柳そのものの狡るかしこさというか、至極太平で、著者とその句集はそっちのけで、儀礼的な祝辞が済むと早速お披露目になって、酒、肴が入って散財しかねない有様である。たまたま私は豆秋氏の還暦祝賀と「ふるさと」出版記念会が数年前、阿倍野区旭通りの金塚会館で百数十名の柳人参加のもとに挙行されたが、これは出版記念というよりも還暦祝賀の川柳作句会であったと記憶している。私はその会ではたまたま招かれて、選者でなくて、祝辞だけ述べたつもりで、何を喋ったか忘れてしまったのは、どうせお坐なりの祝辞くらいで、たいした真実味のある友人としての赤情を出さなかったように記憶するが、後で私に親しい柳友から、亜鈍の祝辞は、豆秋、豆秋と呼びすてにして傲慢

であると、面詰されたのは果敢にとられた。成程豆秋は私の先輩（川柳上でなく柳友同志の交誼）であろ

うし、既に柳壇にその人ありと知られる有名作家である。がしかし私の場合、あの記念会の主催者側に私の立場はあり、（註・1）いわば著者豆秋と同じ立場にあるとすれば、参集した並居る柳人諸氏に向って壇上に立った場合、豆秋先生とか豆秋氏とか言う方が却て可笑しいのではないか。会社に電話がかかって来て社長さんがいらっしやいますか。それを給仕が、「ハイ社長さんはいらっしやいます」では相手方に礼を失することになりはしないか「ハイ、津村は居ります」でよい。（註・2）しかしそういう儀礼的な言葉使いの良し悪しをここで私は問題にするのではない。私は多少でも祝辞の中で、豆秋を豆秋と呼び、些か句集にケチをつけるような言草があったとすれば、それは私が詩人達の出版記念会と同じようなエチケットで多少共うわべのオベンチャラや提灯もちを全然やらなかったことの不遜を私はとがめられたとするなら、私は凡そ柳壇の出版記念会ほど裏面白くないものはないと思った。花嫁花婿をホメちぎる結婚披露に出席するみたいな記念会には金輪際出るものではないと私は考えた。

結婚式場
長生殿

金座 定休
神座(2)控室16宴会場
(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか、貸衣裳一切を完備しております ●6階

松坂屋
大阪日本橋三

大体に於て川柳界では〇〇号出版とか、その雑誌の主宰の個人的な記念とか、いうことになれば直に、兼題、席題を十題ほど集めて、全国有数の柳人を招聘して句会を開くものらしいが、成程ある意味では全国柳人の親睦を図る効果があっても、決して川柳自体の発展や変革を願う、デスカスもなくシンボジウムがないのは遺憾千万である。

よく川柳の雑誌誌上で、それぞれの誌上で仲間同志の句評をしているのを読むが、あれは句の批評でなく、句の解釈や説明で、ただ「うまい」「凡手でない」と仲間ほめばかりしているのは感心したことではない。

私は川柳界には批評家が少なくよく聞

るのでなく、作家一人々々が批評をもっと活潑にす可きで、自らの行動(記念会の行事。句会の内容。雑誌上に於ける記事)に批評精神を横溢するのが、もともと柳壇本来の姿でなければならぬと信じる。

私は其の意味に於て、ここに豆秋という作家を組に乗せて作品の検討にうつろうと思う。亜鈍は口が悪いと周囲の柳友は言うが、そうではない。私はオープンチャラを言うのでなく、又私自身、謙遜の美德など持合せない生真面目な人間である。冷酷なまでの人間解剖は科学者の如く鋭利なメスで豆秋とその作品を分析しても、そこに感情的な義理人情をさしはさまぬことを自戒してペンを進めることにしよう。

(註・1)「ふるさと」は川・雑阿倍野支部から発行された。阿倍野支部は豆秋と私によって創立された。五月号の「殿様句会」の頃であった。豆秋の還歴祝賀、兼「ふるさと」出版記念句会の企劃も主催も阿倍野支部の木口賀峰氏が中心になって支部全員が御世話した。本文に「たまたま私は招かれて……」とあるが、其頃私は一人縁内障の保護に流離の生活を他地で送っていたが、記念会の案内を受けて、当日にわかに帰阪した。

(註・2) 本文津村とあるは、豆秋氏の勤務先、K・K津村製作所の社長、津村氏。

豆 秋 録 音

豆秋論を草稿する場合、一応豆秋の人となりを知って置く可きだ。と考えて私は一日豆秋と逢い、サシで談笑して話題を彼自

身の履歷へ水をむけていった。いや酒をむけていったと言ひ直した方がよいかも知れない。しかし私は彼の伝記を書くつもりでもなく、私の根柢は本当は豆秋自身のことを書くよりも、私の川柳理論の裏付にする可く、豆秋とその作品が取材しなかった故に、そう精しく訊ねようともせず、彼もすんで私事にわたって自己を語ろうとはしなかった。

故に簡単にしか読者へお伝えできないが、暫らく豆秋自身のあの能弁とは言えぬ吃りながらの口調を想像して頂いて彼の録音をお聴かせしよう。

ほくの故郷は讃岐(四国)の観音寺町。中学は同地の三豊中学でした。兵役は甲種合格で直ちに一年志願をして普通寺師団に入り、陸軍歩兵少尉に任官しました。

ほく、若いころはよく遊びましてネ。始め養子にいましたが、養子が務まらずに戻されてしまいましたよ。それほど遊びもしたし金も遣いました。その頃は太正初期ですがほくは短歌の同人雑誌を出してました。その頃の同人の中に和歌浦系子、小波若郎などの新派男、女優や、名前は忘れたが文学芸者が二人も加盟していました。ほくの中学時代の友人でネ、当時大阪へ出て関西大学の学生であった西沢黄鳥君が、主にはくを扶けてくれました。え！短歌雑誌の名前ですか？「絵日傘」っていうのです。ほくのペンネームですか、待宵草。っていったんです。センチですって。そうですネ。あの頃の短歌は皆ロマンチックでしたネ。ほくの歌ですか、さあ殆ど忘れま

したけど、このころ一つ違えば気狂に

ならんとしつゝ如月はきつ

というのがありますが、亜鈍さん、どうですか。一寸川柳がかかっていませんか。

ほくの川柳を始めた動機ですか。大阪へ出てきて、(大阪へ出たのは昭和初年と推定さる。亜鈍)その頃行きつけのオデン屋の「万よし」を路郎先生がひいきにされていて、後には市会議員になった庄万よし氏が親爺でしてネ、新蛭子橋南詰にありました。(註・1)今の「大万」のように店の呑み客の目のとどくところに川柳がいっぱい張ってありました。路郎先生の句もありましたが、＼よくもまあ豆腐ばかりとあきれた、＼なんかの句がいまでもほくの印象にのこっていますが、詠めばよむほど段々面白くなってきたので、なあ、おっさん、僕でも作れるか、と訊くと、ああわけないで一いつくってみ、というので、「桃」という兼題であつたかに、

人形へ一年ぶりに桃が咲く
を作ったのが、こらイケ
ると万よしさんにおだてられたのが、まあ始まりですネ、雅号はほくが酒の肴にさえ豆をよく喰べることから、豆酒と万よしが名付けてくれましたが、ほくは季節のうちに秋が好きなので、酒(シユ)にひっかけて・豆秋と代えて現在にきています。

以上を取材した私は満足であつた。或は豆秋という人物に興味をよせる読者があれば、なお、豆秋の家庭生活、女出入(想像)に彩なす私生活。職業に關聯した経済生活に触れることが必要であらう。私はしかしこれ以上は彼と彼の作品を通じて、それら豆秋の私生活を想像すればよい。そして読者は私の想像によつて、豆秋をイメージするなら既に実在の豆秋では無くて私の須崎豆秋論が読者に映像されることになる。

斯くして私の川柳理論は読者と筆者の豆秋という共同の場に遭遇して、理解をたすけることになれば幸せである。

(註・1) 庄万よし氏は昭和29年8月14日没。豆秋氏が万よし氏のオデン屋「万よし」に通ひ始めたのは昭和三・四年ごろ、当時、「万よし」の近く港町補綴区に勤務していた川・雑副主幹になった福田山雨楼氏(故人)阪大の長崎柳秀博士(故人)豆秋の無二の親友木谷鮎美氏などが常連であつた。(豆秋談話)

安産のために
安産のくすり
ワダカルシウム

ビタミン入小粒二〇〇円
ワダカルシウムは妊娠中なるべく早目からおのみ下さい。





古川柳研究界の 現状

山路 閑古

従来「古川柳研究」「古川柳」などの機関誌が出ていて、古川柳研究界の様子が新川柳方面にも伝わっていたが、昨今そうした連絡を欠いているのは、甚だ残念であると思う。

本誌に於ては路郎主幹が、古川柳については並々ならぬ関心を寄せられ、私ごとをも洞友の中に入れて優遇されているのは、まことに光栄の至である。最近主幹が健康ふるわれず、追々快方に赴きつつあるというものの、尚当分の静養を要する状態であるということに耳にして、かねがね御見舞の一言をも申し入れたかと思つていた。ここでは月並の御見舞の言葉の替りに、私どもの担当している古川柳界の現状を述べ、それがこちらの読者諸兄姉の多少参考ともなれば、編集責任者たる病主幹

を喜ばせることにはならないかなど、甚だ推参な考えで、一筆認めさせて頂く。

古川柳研究界に於ては、昨今研究の主力が専ら川柳評万句合に置かれている。それは古川柳の教科書といわれる「柳多留」「柳多留拾遺」「末摘花」なる三柳書の原典が、大体に於て川柳評万句合であると目されるので、原典万句合が略々完備した今日に於ては、一挙に根元を衝くことが有利であるところから、研究の方向がおのずから川柳評万句合の一本に絞られて来た訳である。

その研究の資料として用いられているのは、岡田三面子博士蒐集の、いわゆる岡田本万句合であるが、先般その複製刊行が完成し、大体全国の研究家に行き亘る程度

には普及している。しかし部数が限定され、充分とはいえないので、次回には是非とも岩波文庫本程度の、誰の手にも入り易い出版物を発行するまでに漕ぎつきたいと思つている。それには更に厳密な校訂を要する訳であり、その校訂の一手段として、岡田本をそのまま写真に撮影し、写真を通じて更に多くの人の目を以て、綿密な観察を加え、合議検討の上で、校訂加註を施すという方針が立てられるに至った。

本年に入つてその実行にかかり、先ず岡田本万句合全部を王子製紙博物館（専ら副館長佐藤秀太郎氏の尽力による）に持込んで整理した。それから適当な写真技師を物色し、千数百枚に及ぶ万句合の刷物乃至写本の撮影を開始した。その後約半年の日子を費して

撮影を完了し、全部漏れなく四十八巻のフィルムに納めることが出来た。フィルムは映写廊大することによって、原本同様鮮明に読みとる事が出来るが、またこのフィルムを原版にして、写真複製版を作ることも可能である。尚保存の万全を期して、正副二本のフィルムをも作った。

岡田本の帰属については、いずれ近き将来に於て確定を見ることが思われるが、この際貴重な文献を取敢ず影写して、散佚を疑われる最悪の場合にも対処し得たということは、まことに慶賀すべきことである。

次に川柳の文学的地位を高めることについて、愚見を申し入れる。元来川柳は俳句と並び立つべきものであるにも拘らず、常に俳句の下風に置かれ、周々文学から締め出しを喰われ兼ねない傾向にある。俳句界からは芸術院会員を二名も出しているのに、川柳界からは一名も出ていないということとは、川柳の勢力が俳句に及ばないというよりも、川柳が文学界から除外されていると考えた方が早いようである。

これは川柳が本質的に欠けるものがあるのではなく、川柳の文学性が世間に充分に認識されていないからである。古川柳研究者の立場としては、まず古川柳を学問化して文学的の基地を作り、この基地によって新川柳を支持することが必要であると考えている。

先年来古川柳研究者の一部は、至文堂から「国文学の解釈と鑑賞」の川柳特集号を数回に亘つて発行しているが、これは国文学界に川柳を浸透させる手段に他ならず、古川柳の研究発表が中心ではあるが、その都度新川柳方面の協力をも求めることにしている。

川 雑 不 朽 洞 会 員 の シ ン ボ ル

美しいバッジが出来ました

スマートなデザインは、キツトお気に召すものと自負しております。

(1個200円・送料8円)

申込所

大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地

川 柳 雑 誌 社

(振替口座大阪 75050番)

これは新川柳の方からも同じことがいえるのであって、新川柳もしかるべく文学運動を起し、古川柳の学者グループの協力を求めるようにして頂きたい。両者一致協力して川柳文学の地位向上をはかるということが、目下の急務であると考ええる。本誌でいえば、路郎主幹を芸術院に送り込む位の意気がなくてはならぬ。

御承知の通り、川柳と俳句は同じ俳諧の母胎から生まれている。俳句が俳諧の発句からスタートしているのに対して、川柳は俳諧の平句から出発しているのである。発句は有季と切れ字を規約とし、十七字を原則としているが、平句は十四字でも十七字でもよく、その他に何の規約もなく、極めて自由である。あまり自由過ぎて戸惑いを起し、却って発展を阻害されている傾きがないでもないが、もとより自由なものであるということは十分に理解されてよい。

柳祖は前句附という形式を用いたが、これは平句の精神を示したの他ならず、しかも過渡的の処置であって、後には前句をも捨て全く自由なものとした。川柳には可笑味がなくてはならぬ。諷刺がなくてはならぬなどの制約は一つ

もない。平句にはそういう制約がないからである。

そういうのびのびとした天地に於て、思うままのことを放吟する。それが川柳の根本精神であって、私どもは川柳評万句合を研究することによって、川柳とはそういうものであるということを改めて認識させられたのである。

世間でいわれているように、古句の中にはすぐれた作品が多いことも事実であるが、いろいろの面から研究してみると、これは作者の見識がすぐれていたことに起因するようである。高い教養と、広い人間の幅を以って、自由の天地を闊歩するその気持が作品の中にこもっていると考えられる。

川柳の内容は極めて通俗であるが、これはその母胎である俳諧の伝統であって、俳諧は平明通俗を尊び、且つ極めて庶民的であった。見識の高い当時の作家たちには、それがたまにまで魅力的であった。つまりえらい人たちがわざと庶民的な句を作って醜態を解消する手段としたのであった。「甲子夜話」の中に、林大学頭が松浦平戸侯に、近頃こんな句があるがといつて

目は眼鏡齒は入齒にてこ

と足れど

なる柳句を示したということが書かれてある。この句が、時の文部大臣兼大学総長の役目を持つ、有名な漢学者林述斎の作であることがこの記事によって知られるのである。この句が果して述斎の作であるかどうかは別として、こういう人々がこんな句を見せ合つて、互いに尊厳を晴していた。熊さん、八さんの仮面をかぶつて、平明通俗な作品を作つて盛んに投句していたものと思われる。だから川柳初期の句には面白いものがある訳である。

けれども後期になると、こういう有識者たちが一時に姿を消し、本当の熊さん、八さんが現われて来て、つまらぬ句を作るようになった。それには賞品をかけて客を集める近代風の句会が発達したことも一因で、識者たちはそういう低目標の席には立ち入らなくなつたことが想像される。句会の形式と川柳の墮落とは密接な関係があるらしく、古川柳を研究することによって、こういったような事情もだんだんわかつて来た。

句会の発達については、いろいろと社会的要素も加わつて来ることであるから、その良否を簡単に

に批判し去ることは出来ないが、教養の高い、人間に幅のある作家が、わざと平明通俗の句を作つて、錯愕的気分を楽むということの中に、古川柳の特色があったといふことは、大いに考えてよいことだと思ふ。物事をよく弁え、人生に経験を経んだ人程面白い句が作れるということは、常識的にも考えられるけれども、事実もそうだったのである。さもないければ右に述べたような、ひろびろとした天地を自由に駆け廻ることは出来ないであろう。敢えてその技術は問わない。述斎の右の句のように、まずければまずいなりに、と

はけたような面白味がある、八さん、熊さんの脅伸びしたり、息切れたような句では所詮文学鑑賞の線には上らぬ訳である。私どもは古川柳を研究するだけで、殆ど実作ということをやっていない。唯いろいろの観察をして、それが実作する人々の参考にねばよいと思ふだけのことである。新川柳の人たちが虚心坦懐に私どものいうことに耳を傾けて呉れれば、時々この種の進言をしてもらいと思う。ここでは高い見識を以て、つとめて阿呆な句を作りなさい。或は見ごたえのする作品が出来ても知れないという、一つの提言をしている訳である。

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味い方—

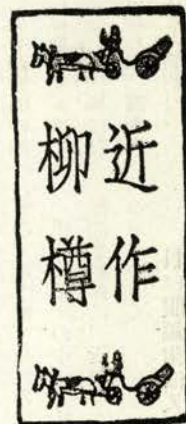
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味い方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

価 二五〇円
送 三五〇円

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507



麻生路郎選
北川春巢選

婦唱夫随胡瓜もみにする暑さ 宇部市 上林 粗影
共稼ぎの汗が冷奴を呼びたがり
秋祭済めば神主につめたい風
お茶漬に停年の髭は淋しいね
言い負けた女の意地が下駄の音
食用蛙は妻の留守に料理する
河童かと聞けば金槌海の色
留守を頼まれ洗濯物もたのまれ
念願が二泊三日の湯に疲れ 兵庫県 永尾 永断
一汽車をずらせてビール飲む暑さ
蜘蛛の巣の如く履歴を送れども
目覚しの代りを試験中勤め
売に残る氷へ家の子が待機
親善の野球按摩を呼んで置き
我れは山の子大阪からリュック
定刻に行けば反対派ばかり 小松市 関戸宗太郎
優勝旗補欠へちよいとだけ持たせ
アンケート馬鹿は承知の上で書き

アルバムを閉じればもとの倦怠期
栄養があつて娘の氣に入らず
百万円貯めるコースで鼻をかみ
新調の背広で来たに以下 同文
実力でやる気云い度い事は云い 出雲市 山本 朱紅
書見器にサヨナラをするいい門出
半ドンのは野良着で使われる
下宿から通う課長で遅刻せず
ルージユまで引いて年頃肺を病み
七夕をペシヤンコにして通り雨
臨月の女の口からロカビリ 岡山県 太田 蓑流
買う方が得な西瓜の肥をやり
役得で貰うたビールでもてなされ
弔詞とは別に頑固な世を終り
窓の陽に映えて金魚のバレイリーナ
百姓はいやです二等航空士
夾竹桃とてん屋に蔭をかし 高知市 須藤 俊江
白バイの獲物見つけた音をたて
動評をのしる酒を追加する
夕顔が物言いたげに一つ咲き
七坪の家を建てるに本を買い
日々多忙思い出で過ぎる恋 堺市 沢田 美喜
愛猫に迄も避妊をさせたはる
教会を出てからつけるイヤリング
めんどくさがりや造花を活けて
ピンクの蚊帳吊つても見倦怠期
まだ夢を追うて桔梗の花を活け 大阪市 丸本 花美



川柳と私

木村水堂

私にとつては川柳は好きと云う程度の単なる趣味ではない。肉親に次いで必要なので、私の肉体の一部と云つても過言ではない。常には好きな食物もその日の体の具合で嫌になる時があるように、川柳がいつも好きとは限らない。非常に煩らわしく、感じる時も再々ある。

川柳雑誌には川柳に関するいろいろな意見なりまた貴重な論文が毎号載っているが、たゞそれが有名な大家の原稿であつても、私はそれを全部鵜のみはしない。場合によっては没にすることもあり、私の体に適応した部分だけを頂戴して栄養にしている。

北川春巢氏が本誌に私のことを（私は氏は生れながらの川柳人と云う気がしてならない）という意味のことを書れたことがあるが、氏のいう川柳人とは一かどの川柳を創る人という意味でなく、楽しみながら川柳を創る人という意味である。私が川柳をつくり出したのは小学校を出た頃で、戦前講談社から発行していた「キング」とい

[illegible]

桃谷順天館

う雑誌に谷脇素文の川柳漫画が載っていたが、それに投句して入選して二円の図書券をもらったのが病みつきで、上手も下手もわからず我流でつくっては娯楽雑誌に投句していた。昭和九年に満洲国が独立して、国際連盟から英国のリットン卿を団長とする視察団が来た時に、「実業之日本」という旬刊誌に投句した。

満洲をはつきり知った視察団が入選して、故青嵐永田秀次郎著「梅白し」という随筆書をもったのが今では、はずかしい一つの思い出になっている。

川柳の専門誌に投句をはじめたのは昭和十五、六年頃で、川柳雑誌その他番傘、きやり、ふあうす、と、蟹の目、川柳常会、なごや、むつみ、すげ笠、満洲で大島蒲明氏が発行して居られた柳誌（誌名



おとこいるかぎりおんなのう？
 メートルでいうホームラン物足らず
 としよりはとしよりなりの忙しさ 鳥取市
 寝ころんでいる間も稲は株を張り
 ジェット機の下で田草の四つん匍い
 善いことを善いと言うののむかし
 山へ来て山の空気をほめただけ 豊中市
 舞い扇忘れて帰るほど酔おて
 大阪の空を絵にする 遠花火
 浴衣着てブラリと出るスラレて来

映画大番を観て

ボーナスで株を買おうかなと思ひ 宇都市
 片足が洗えぬままの売春婦
 水道も予算ももれている役所
 夫より分家の魅力へ嫁いで来
 悪友は女房に土産持つてくる 高知市
 結局は高い月賦で買う生活
 本心を云うのに女の咽喉細し
 ハッキリと云えば女にリードされ
 出勤を門まで送る紅を塗り 大阪市
 仕立物しますと書いて昼寝する
 温泉の話をそらし映画に出
 換算表括り付けとく市場範 兵庫県
 叩く気になったらハエも寄って来ず
 仲人というハイヤーの乗り心地
 サンガラス悪事たくらむよ。寄り 美称市
 痩せてても髯はきっちり伸びてく

同 同
 鈴木村諷子
 同 同
 石川ひさみ
 同 同
 平田 実男
 同 同
 川竹 松風
 同 同
 竹内花代子
 同 同
 河原みのる
 同 同
 安平次弘道
 同 同

唐黍の匂いにふけし夏祭り
 地下足袋をひきずり金を憎むなり 笠岡市
 面白くなったで下戸がほっとかれ
 涙もろくなって脳溢血治り
 誰に聞かす積り夜中の中国語 大阪市
 親しさがお茶の代りと出すコップ
 大ジョッキあの娘は何をする人ぞ
 あてにしている日曜をあてにされ 京都市
 折角のハイファイで三橋を追ひ廻し
 肩書も名刺もいらぬ職に生き
 良友も悪友もなく病み続け 滋賀県
 いけそうな顔が代理でやってくる
 出不精を知ってお義理で誘って見
 サイン帖猫に小判の母に見せ 笠岡市
 もう少し欲を出せよと子を叱り
 パラソルが旧型余り出なくなり
 彼も又食うだけのことホットする 兵庫県
 奥歯だけまだ私物なり血が通い
 泥ついたままで歩けるのも五月
 夏草を繁らせたままひとと住み 大阪市
 すぐ渴く生命の水がたよりなく
 バラの芽が出て来てからの植木鉢
 商売に向かず土建でのし上り 広島県
 長男の嫁で一番無愛想
 田の水を見に行く息子オートバイ
 捕かまった親分の井小唄めき 伊丹市
 起きて見つ寝て見つ風鈴に風も

同 同
 木山 遠二
 同 同
 米浪進之助
 同 同
 都倉 求女
 同 同
 土守 蜻蛉
 同 同
 佐内 隆文
 同 同
 遠山 一雨
 同 同
 国府 玉枝
 同 同
 杉原 愛鳩
 同 同
 小川静観堂
 同 同

お知らせ
 バックナンバー御入用の方は、
 往復ハガキでお問合せ下さい。

川柳雑誌社

失念)と台湾の柳誌(これも誌名失念)、故人の合田笑字坊氏が発行していた川柳界、そのほかまだ一二の柳誌にも投句していたと思うが、私の応召中の戦災で柳誌はことごとく焼失したのでこの分の記憶がたしかではない。

本社句会で川村好郎氏が、川柳に惚れると云われた。惚れるということは、こうしたらああるという先の結果を考えずに、一筋にすすむことである。だから川柳に惚れるという意見だった。しかし事川柳に関しては私の場合はこの説とは逆な解釈である。

惚れるという意味を男女間にあてはめると、恋愛結婚は勿論のこと、見合結婚にしても夫婦になつてから相互間に愛情(この場合は惚れ合う意)がわくのが通常であるが、ただ愛情だけで結ばれていると長い人生の間には、いつか離婚という破局が必然的に来る。

たいていの夫婦は、最初のうちはただ愛情だけで結ばれているが、それがいつの間にか愛情を超越した一心同体という象ちになつていく。だから喧嘩しながらも添い添いけるのではなからうか。

私の場合、単に川柳に惚れただけ



新婚の写真着付けばかり賞め
女とはアイスクリームだけの賭け 大阪市
任期後は滞納もして元税吏
純愛は海岸線をあかず行く
新調の値ぶみもされてすむ見合 小松市
テープ切り女に還える表彰台
添い遂げた頃の家賃をくず屋置き
休職になって療養腰を据え 西宮市
牛乳で洗った顔が日焼けをし
サンガラスかけて悪友から逃れ
鼻唄でドライ葬式から帰り 石川縣
税務署の裏で小便して帰り
間借りしてちよっぴり頑固さ がうすれ
食うための赤旗だとは見てくれず 大蔵市
長いのにまかれておればめ が 食え
小遣いと別に貯金の金は取り
根気よくどこまでついて来る貧乏 見島市
名を褒めて風呂敷返す内祝
若う齡云うて社長にある元氣
冗談も云わず怒りもせぬデスク 笠岡市
連休の晩酌だから値切られる
ドンダリの中でもわが子円く見え
入れあげた末に病夫があると知り 只塚市
よう来ればうるさく来ねば 氣にか
借金で買えば扇風機ぬくい風
メートルで買って鯨で裁ち損じ 和歌山縣
会長へ後家で押切る意を買われ

同 小竹 史子
同 位守正柳子
同 樋口 寿栄
同 樋口 寿栄
同 同村 虹要
同 同
同 河井 庸佑
同 同
同 伊丹柳瓢子
同 同
同 高木 桃里
同 同
同 護川 梢月
同 同
同 木下 一休
同 同

隠居からしなびた肌を焼く匂い
押しの手を教えた方がまだ独身 西宮市
ガラスとは見えぬ飾りの八頭身
未練ではないが写真はよう焼かず
金魚の世話母さんに子はまかせ 今治市
音のする金それでよし子の貯金
ピアノだけ鳴っていました夏休み
義理知って義理欠いている背 京都府
死に土産たんまり暇を見て歩き
伴せをお揃いで見る夏祭り
おでん屋で逢えば課長の方が逃げ 平田市
友情で貸して裁判沙汰で取り
アクセサリーらしく免状金で買い
人だから猫が死んでただけのこと 愛媛縣
警察へだけは素顔のままで行き
孫にやる硬貨を貯めて祖父達者
亡き夫の眼鏡をかりて針仕事 下関市
停年の父を旅行に娘が誘い
蚕のねむり確かめ髪を娘は洗い
見舞客飲めない嘘を言うてくれ 神戸市
感激をおどけて見せるのも盲
腹立ちやとはこの事か飯の砂
人生の裏を歩いて霞町 大阪市
窓の蜘蛛風と闘いたくらめる
無料バス市場通いに便乗し
母からの貧乏暮しがつきまとい ハワイ
子や孫へグランパ恩給お裾分け

同 中橋川太郎
同 同
同 越智 一水
同 同
同 塚脇 笑太
同 同
同 石橋方古人
同 同
同 鳥井 川鳥
同 同
同 宮藤 慈雨
同 同
同 小池 鯉一
同 同
同 石井 伸生
同 同
同 宮政 周防
同 同

けではこれ等の柳誌に浮気したのだから今頃は川柳に別れていただろう。と云うより恐らく失っていたらう。

麻生路郎先生の門に入ってから川柳雑誌一本で進んでいる。路郎というよき師についていたことに私は誇りを感じていると共に、幸福をも味っている。

「この頃スランプだ」と云う人があるが、私の場合には過去、現在、そして将来ともその言葉は適用しないと思う。スランプとは好調を対象とした言葉だからである。

人体は一年三百六十五日何時も調子がよいものではなく、時には軽い風邪も引いたり、二日酔いで頭が重たく感じたり、睡眠不足で気分がなんとなくすぐれない時もあるのと同じで、私にはすらすらと作句出来る時もあれば一句を纏めるのに苦勞する時もある。だからと云って私はそれをスランプだ

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話の三三四番

御神輿へ人出程には手が鳴らず 鳥取市

土江 洋々

三振をしてもファンは嬉しがり

同

蟹の泡逆らうものに似て淋し 小松市

上野 錦水

父の背を流して父の老を知り

同

青空をかき廻して釣れぬ竿 小松市

万仲 一進

法律を逃げる無燈車まっしぐら

同

頼ったをついただけの父の愛 西宮市

御園生 すみ江

あの人も課長になって距離が出来

同

豪快な笑いと別なチツプなり 今治市

越智 義夫

偽って月の丸さに腫を外らし

同

宿題にしておく恋を得て九月 市施市

久米奈良子

階段を磨く役なる百貨店

同

化粧して待つボーナスが飲み歩き 玉野市

小谷 仙山

金持てば隣りが過去をふれ歩き

同

生花へ世辞を言うのも女客 岡山県

杉本 たつよ

倅せは稼ぎの好きな子がそろう

同

妻の里お灸が効くと言ったそう 熊本県

淵川 秀敏

お土産の一つナイター見るも旅

同

ようヌード撮らしたなあと雑誌 大阪市

萬代句念坊

スラム街チユウ一杯に明日の風

同

格別の味は鎌にて割る西瓜 愛媛県

河本南牛子

うれしさは息子がかつぐ米俵

同

副業となれば鶏糞まで拾い 石川県

高瀬 幸路

鮎の趣味出費買値の五六倍

同

金持の金の様には子を生まず 西宮市

山本 一傘

五十路まだ初恋の娘の齢かぞえ

同

観世音枕頭に置き博士病む 芦屋市

メロン切る患者自ら指図して 大阪府
 大掃除西瓜が冷えた頃に済み 大阪府
 税込みを云わずに見合決まりかけ 西宮市
 あんな顔とお茶の座のフィアンセ 西宮市
 変人の人生観にはつきあえず 宇都市
 スト続く社宅カンパの米をとぎ 宇都市
 心まで腐った子でもあきらめず 宇都市
 博多節空路を駆けた手をたたき 津和野市
 テイルーム今ビツタリの曲になり 津和野市
 露のひぬ間の切り花そつと届き来 河内長野市
 お迎いはまだまだと云う共白髪 広島県
 孝行のつもり世間へ目をつむり 広島県
 遺品わけおしめにするのも貰来 東京都
 束縛されるのも良いものとの 東京都
 新柄のサンブルを着て店の番 西宮市
 自動車のオアシス美人おいてあり 西宮市
 応援の方がよっぽど口惜しがり 岡山県
 産制の講話へ農繁繰り合わせ 岡山県
 往診をさせて万才聴いて居り 宮崎県
 如才ない同士借りたり借られたり 宮崎県
 蛋をとる妻の手つきのたしかなる 岡山県
 三級を取ると算盤不足がり 岡山県
 冷奴象牙の箸からすべり落ち 加賀市
 スタイルの話題が出たのでお返し 加賀市
 サンダラス彼女がかけたら別の味 津島市
 製品の置場に困る社の不況 津島市
 玉に疵酒量越さねばよい男 津島市

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円

送料(二冊分)八円

とは意識した事はない。これを裏返せばいつも下手ということになる。正にその通りである。

路郎先生が(いのちある句)を創れ、一句を残せと云われるが、私はそうかた苦しう受取っておらない。吉川英治の宮本武蔵が剣の修業のためには、お通の愛情さえ素直に受入れないような、そんなきびしい気分でははよう作句出来ない。後世に残るような名句は誰しも創りたいが、人それぞれに天分があつて私には荷が余りにも勝ちすぎる。だから私は、私の能力の限界でそれが下手であらうとも川柳を楽しみながら作句して、精神的に豊かな人生を送っている。

暗中模索時代

萬代句念坊

自分は今暗中模索時代と思っています。色々諸先輩諸先生の作句法を拝承しても、自分が必ず其の通り実行出来るものでなし、専門川柳作家と違い趣味の一環であり自分の句作には大いに歯がゆい点があります。確かに先輩諸氏の句は参考になり中には独りはお笑むようなものもありますが、皆立場々々が違つていて作句の材料、写実



ニユー・ルツの末路案山子が派手に着る 宇部市
大蔵も外務も兼ねて妻達者 同
合槌をうつ隙もない喋りよう 岡山県
花さして見ても男の荒世帯 同
鼻くそもめつたにとれぬ地位に 大阪府
肉体派無機物 なみに扱われ 同
本場の事を云つても叱られる 大阪府
長生きへそれでも用意だけしとき 笠岡市
母上は花火が寝た頃涼みに出 鳥取市
水着の線コケシのようだとか 大阪府
重役と同じ土産の終電車 西宮市
折角の料理もフォークままならず 広島県
ワンピース看護婦さんと云う香り 米沢市
逆転のホーム握手 手が足らず 大阪府
怠けるように闘病けなされる 貝塚市
言訳は聞かぬと云って目はゆるし 西宮市
満潮に追われながらの潮干が 見島市
親の気も知らず末っ子よく 兵庫県
水ばかり替えて待ってる喫茶室 大阪府
家中が皆働いた夜の膳 枚方市
台所タイル張りして嫁を待ち 兵庫県
時計修繕十年の小言聞いて来る 八代市
寝押ししたズボンで病院通いをし 七尾市
ナイトターがすめば暑さが又もど 西宮市
どん底へ眠れるだけの幸があり 須崎市
笑うだけ笑うて女散ってゆき 西脇市
常連の図うしさに司会負け 岸和田市

上杉 青山
同 美沙
同 道二
同 保夫
西本 二路
木山 八文銭
岩田 敏子
宮原 東雲
塚田 昭二
石崎 雨石
大橋 勝三
堤 杉本 一鶴
三上 英路
鎌田 銀子
藤本 月か
藤富 淀月
宮川 珠笑
斎藤 道雄
永松 秀三
松高 球絵
村上 蟠蛇
高橋 岳詩
保西 三郎
中野 三郎

繻紙で蠅のものがくを見て笑い 岡山県
母の日に母の飲まない酒が出る 大阪府
金のある方へやっぱり低姿勢 宇部市
金欠病ですわと妻は愚痴を云い 松江市
優勝の汗フラッシュに反射して 大阪府
文化祭背広を着ても手鼻かみ 笠岡市
素うどんに出前の声が大きすぎ 大阪府
口紅の先生とても春じやもの 山形県
ブーム消え暑さ身に沁む蘭草刈り 笠岡市
悪口も云わず聞かずの良いくらし 大阪府
焼増しをする程修正御意に召し 鳥取市
あわれなり酷暑の下のかきまゆげ 岸和田市
血を分けた蚊がうるさく眠られず 豊中市
金貯めてからは意見もよく通り 宇部市
お目出度の振舞い酒の味を賞め 西宮市
昼休み風呂敷だけの店が来る 大阪府
ボデービルスパーマンになつたり 大阪府
土用うしはも井で妻軽く逃げ 西宮市
お茶がわりなどと野心を秘めた酒 大阪府
一人だと知ってか虫も鳴いてくれ 玉島市
心地よい夏座蒲団に長居をし 西宮市
学歴の嘘ははつきり誤字でばれ 堺市
一望に青田が見える窓で読み 金沢市
合槌もうてぬ惚気を聞かされる 小松市
ギブスとっても二本の足をたしかめ 和歌山県
貧しさへ抵抗だけの浴衣買う 西宮市
つきあたる度に人間鍊れて行き 神戸市

本多駄目八
安並 十七
岩原 箔川
岡崎 祥月
本多 清人
出原 真奇
石原 浩
菊地 白葩
谷本 鈍愚坊
吉川 悦子
高田 穂波子
西川 兵太郎
林 関男
神田 豊年
網元 慧星
中西 兼治郎
保田 華甫
酒井 丹謠
村田 肇
井上 旭峯
村上 道草
武田 軍治郎
桐谷 紋六
筒井 吉枝
山下 光男
安田 義子
沢田 恵甫

味のてーこ

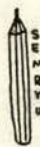
モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい



の根本が違っています。先輩諸氏がそう感じられても自分は其のものに對してそう感じないかも知れず、天性からの上手さは確かにあるのですから自分のようなのは努力の不足は別として「暗に鉄砲」であります。本社以外の小句会に参席して切に感じます。殊に晩年の勉強で如何に人生の経験を重ねるとも作句経験少なく個性の発揮が強く融通無碍の境地の無いのは残念。多読も結構ですが酷しい添作の批評を痛感します。例えば路郎先生の新潮柳鑑賞、古方氏の批評のような。現在の自分の境地は誰れしも一度は御経験のある筈の暗中模索時代であります。今の追われているような点取虫時代をはずかしく早く切抜けたいと思っています。

俺に似よおれに似るなと
子を思ひ 路郎

のような名句の一つを残したいと思ひます。



老境と若いひと

品川陣居

だいが前々から大阪を「愛してゐる」ことは書いてきたのでネタに困るが、今日は鴈治郎はんといきましょう。

ほとくの子供のころ東京の新富座
が松竹経営になってから顔見世に
こんでいたのを世にも美しいと感
じたのである。

よく鷹治郎が東上した。だしものは十八番（おはこ）紙治・封印切の心中つやものから大塲寺堤、石切の大物にいたるまで、何年かにわたって、ことごとくといつていいほど見物した。

ある年の紙治で、ほくは母や近所の洋酒問屋のおめかけさんや八

丁堀美人こんくゝるに当選した。土木の親方の二男さんの娘おさくちゃんらと平土圍（ひらどま）ひと榊（ます）買い切つて、母のお好みの五つ六つ目あたりに陣取つていたときだ。

鷹治郎の治兵衛が掲幕（あげまく）をチャリンとあけさせて魂ぬけてとほとほと花道をちよちよこと出ると、治兵衛の麻裏草履の爪さきが、ぼくの鼻ッさきへきて止つた。

ぼくは、じつとその親指を、み

ぼく（とし六十三になるのが
 十三か四とすれば鶴治郎も若盛り
 であつたはずだ）は、こんなにも
 美しい親指は見たことないと驚嘆
 したが、大谷崎なら何とこの美し
 さを表現したろう？ 強いていえ
 ば大錦（おおにしき）の中で間々
 発見するぐらいのものだった。

た。ばくの大好きだった雀右衛門にも、あの味は出せなかつたろう。雀右衛門で思ひだすのは鰯屋のお里である、小屏風に、裏からしごきをばつと投げかけた風情の色っぽさ、何ともいきづまるほどだった。お梶の女房型の身をすてての妖艶さと、雀右衛門のあの

★ 東京ではだいたい派手な句よりも地味な句の方が多く作られている。むかしは花柳歌とか廊吟というような色町に取材したのもあったが、近頃の青年には、そういう零間氣を知らないせいもあるが、第一作句の興味がそういうもの

川柳家を芸能人といつたら叱られるかもしれないが、芸能人は老令になるほど芸が枯れてくるといわれるが、川柳家にもいくぶんそんなうした気味がある。

昔は三十代、四十代の好作家が多かったが東京にかんずるかぎり川柳は老境にはいつてから、これ

つめると、なんとふつくらとした
そら豆の感じで、すこし爪に紅で
もつけていたのか、桜貝の光沢を
おびて、ぐつと爪さきの肉に食い
こんでいたのを世にも美しいと感
じたのである。

郎の恋のときのお梶（梅玉）の凝
艶さというか、妖艶さというか、
極上の色っぽさというか、菊池寛
の傑作では、もちろんあるが、あ
れをあれほどまでに演じ生かした
のは、いつに梅玉のたまものだっ

々、三味線鶴沢何々」と御簾を上
げながら呼び上げる仕来りとはち
がつていたが、伝統はひとつもの
だろう。

文五郎の人形で酒屋をきいたよ
う覚えている。

はみないが、句会場には五十、六十、七十才という老合の人が多い。中には息子と同伴でくる人もあって、東京の川柳はやや老境に入ったようだ。



柳風三國志

(2)

東野大八

さて貂蟬は、主の司徒王允の大恩に報いるべく、逆臣董卓にまづその身を任せ、董卓側近の猛将軍呂布にことあるたびに目をつついたので、呂布は次第に董卓が小面憎くなった。こうなると貂蟬のベースでやわ肌に一きわの香をそそぎ、細腕の白さにヨリをかけて、双方にさかんなお色け放射能を発散、ついに王允の妙計もあって、董卓を帝にするの説きつて宮中に引きよせ、帝らの積年の怨みを晴らしたのですが、その義父の首を手づからたたき落したのなんと呂布でございました。げに怖るべきは色の道でございませう。時の川柳人はこのことをかく詠んでおります。

―逆賊も女一人でけりがつき

―宮女みなどんな手管かききたがり

―その美女のその後はバーへも出た話

董卓を討たれて、その子分の李催、郭汜というサムライが憤った。どこの世界にも親分子分の悪縁はつきまとうもので、今の日本の政界だって、三國志の世なら、何進、董卓にその子分の二の舞が

随所で行われたことでせうが、閑話休置、その李催、郭汜が都へおしよせ、親分の仇、王允をたたき斬り、帝を龍謁にして偉張りかえった。大豪呂布も、一人の力ではどうにもならず都落ち。元來この呂布というのは、腕っ節は強いが頭の方はバア、腕っ節は強いが頭の読みもきかないという憐れな男。乱世の世にもアタマが要った。ところで一方曹操は、賊徒宮中を占拠せりの報に、山東軍を率いて馳せつけ、賊軍二人を破ってもなく宮中へ乗り込んだ。その功により立所に大將軍の位を二つ三つも束にして頂戴した。帝もよっぽどこの助つ人の出現が嬉しかったのだらう。しかし、世間知らずのお天子様というのはこれまた厄介なもので、偉張り返える東条君並の曹操に次第に手を焼きはじめた。もともと、野に呂布がない内は曹操もマクラを高く眠れないので、呂布追討の軍をむけ、プロ野球では布が三勝一敗のベースでついに呂布を討ち破り、毛むくじやらのその首をあげた。ここまでは、曹操と力を合せてきた玄德だったが、呂布が消されると、おハチが彼の上に回ってきた。かつて

の国共合作も、ハラの底はご承知の如くで、共同の敵が消えると、毛色の変った兄弟分が忌々しくなる、と同様の按配である。玄德は敗れて袁紹の居候に、張飛は行方知れず、関羽は玄徳の妻君や二号を抱えこんだばかりに曹操方のトリコとなつてしまった。武神関羽わが手にありというので、曹操は、どうにかしてこの関羽を味方につけようと躍起になる。金銀財宝に美女十人までつけての大サービスだが、石部金吉を空揚げにして鉄の箱へでも入れた様な関羽は、ねっから心を動かさない。トリコになる際の三カ条の条件をたてに、玄德と相会う日をただひたすらに待っていた。シナ芝居にも、この関羽の信義で泣かせるく

だりが幾つも残っている。さてその関羽が、曹操方から身を引く時節到来。というのは曹操に宮中をのつとられた河北の名門袁紹が、百万の大軍を起して攻めよせてきたからだ。その先手の大將は、袁紹の右腕といわれた豪将顔良。さすが曹操の名うての旗本連もこれには歯がたたない。ところが関羽、陣中でバイヒっかけてその足で顔良を一刀の下に斬つて捨てた。三國志の戦争は、今とちがって大將一人の偉信と働きが頼みの綱、一将潰えむると万卒瓦解にきびきび返して敗走するのが常識。おかげで袁紹軍は大敗。怒った袁紹が今度は、左腕の猛将軍と頼む文醜という豪傑をくり出した。ところがこの一振りに首はけしとんだ。この大手柄に、曹操もいたし方なく、関羽を釈放したが、手形を渡すのを忘れたため、関羽は玄徳の妻君、二号の女手をつれて、安宅園の弁慶さながら、曹操の領分を抜けるのにえらい苦勞をした。五つの関所を抜けるのに六人の大將を斬りすてた。

袁紹は股肱の両將軍を失つて敗れ、玄徳は荊州の劉表に頼つていくことになるが、その時は関羽にも再会、山賊になった張飛とも出くわし、おまけに趙雲という豪傑を新らたに仲間に加えた。ところで、玄徳一門が身を寄せた劉表側では、齢をとった彼の世つぎを誰にしようかと迷つていた。先妻と後妻と妾の子がいずれも帯短褌長であつたからで、こうなると妻妾多く子福充分というのは考えものということになる。おきまりの妻妾同志の確執、玄徳これにまきこまれた。先妻の子を立てろといきつたのを後妻がきいて、身内の師団長に玄徳を殺せと命じた。誘ひ出された玄徳は、心ある一人からその由をきいて、単騎そこを逃げ出したが、檀溪という川筋に追い詰められた。川中数十尺、流れは急。乗った馬は的盧という、かねがね馬相が悪く、主人に祟ると伝えられた馬である。迫り迫る敵兵をふりかえつて玄徳は絶望的にこう叫んだ。「的盧、的盧、今日わしにたたりをするか」すると馬は、かつ然と身を躍らせ、三十尺をひとびに対岸へとび上った。三國志前半の歴史的エピソードで、蘇学士の有名な「檀溪」という詞がある。この長詞から、時の革新川柳派はこの様にうたっている。

―バラ色の虹、水煙へ天駆ける

―絶望の底を返せば蝶となる

―どうやら玄徳先生が一大跳躍の心境でも詠つたらしいんですが至ってキザです。こんな戯作の飾りにこんなのは向かないようで、そこはやっぱり古川柳調の方がピッタリですよ。

―西部劇みたいですがなと張飛言い

―しばらくは馬の話でジュース飲む

さて駄句を作つてゐる間に玄徳は、檀溪の大難を脱れてさまよううち、一人の童子に出会つた。その子供の案内で訪れた草屋に、天下の大賢司馬微がいて、諸葛孔明推せんと言葉を耳に、これからの戦争が能くやない、これからあね、そしてそのあとは能政文理じゃよ、とそのオツさんはいう。かくして玄徳が孔明への訪慮と相成りますが、それは次回でおきき下さい。



梶原景時、景季 (上)

富士野鞍馬

朽木

治承四年(一一八〇)八月、源頼朝は、石橋山で大庭景親に敗れ、杉山にかくれた。

「日本外史」は

「独り実平ト俱ニ匿ル。景親大イニ山谷ニ索ム。其ノ族ノ梶原景時ハ、頼朝ノ匿ル所ノ処ヲ知り、コトサラニ之レヲ他ニ導ケリ。頼朝ハ既ニ免レ、杉山ヲ出デテ箱根山ニ匿レヌ。」

と書いているが、これが、朽木の洞中にかくれたことになつていて、その洞中より鳩が二羽飛び出したので、洞中人無しとして、搜索の梶原等は、其処を見逃したと伝えられてゐる。景時は、この時既に頼朝に見込みをつけて、好意をもっていたのであった。

もうよしと梶原つるへ申上げ

(傍五、タル一二三)
飛んで出る嘘を梶原つきおふ

せ (タル四三)

そして後に、頼朝に味方をして、義経を諷言するなどで、相当憎まれてゐる。

梶原も朽木の頃はいい男

(タル一五二)

梶原は二ことめにはあなをいひ (タル十一)

石橋山で、大庭景親は、鎌倉景政の後裔だといつてゐる。また梶原景時も、一の谷で、鎌倉権五郎景政五代の末葉と同じことを言っている。

つまり、大庭も梶原も一族であつたのである。

頼朝に属す

その後、頼朝の鎌倉入以後、梶原景時は、その子景季と共に頼朝に臣属し、氣に入りとあつて、義経西討軍の軍監とな

なり、始終、義経と意見を異にし、屋島、壇の浦の戦いにも大衝突をした話は有名である。「日本外史」には、

「景時、又逆櫓ノ譏ヲ争ヒ、相脚ムコト益々甚ダシ。壇浦ノ役ニ先鋒タランコトヲ請フ義経ハ聴サズシテ自ラ先ンゼリ。景時許屬シテ已マズ、義経怒リテ之レヲ誅殺セント欲ス、景時刀ヲ撫シテ曰ク。

「我ハ鎌倉公有ルヲ知ルノミ」ト。諸將固ニ居リテ、事乃チ解ケタリ。景時ハ鎌倉ニ歸リ、百方之レヲ識セリ。」

とあり、川柳はまた、

梶原が下知は上意とあたまがち (タル六七)

右幕下の御意と梶原頭がち (タル二二二)

梶原は鎌倉殿をかつをぶし (武八)

等と詠んでゐる。

宇治川

寿永三年(一一八四)元暦元年)正月、梶原景季は、義仲追討の義経軍に属することとなり、頼朝秘藏の名馬「生月」を所望したが許されず、「磨墨」という馬を買つて出陣した。その後で、佐々木高綱は、その「生月」をもらつ

たのであつた。この二人は、途中駿河の浮島原で会し、高綱が「生月」に乗っているのを見て、景季は怒つたが、高綱が、「この生月は盗んできた」といったので、事なくその場は済んだ。ところが、その二十日、宇治川の合戦となり、兩人とも、宇治川渡渉一番乗りを目ざし、高綱は、景季の乗馬「磨墨」の腹帯がゆるんでいる——と声をかけ、腹帯をしめ直しているうちに追越して一番乗りとなつた。景季は二番乗りとなつた。この話は有名であるが、川柳にもまた、

梶原を二度だましたと佐々木いひ (タル九)

佐々木めはいかさま師だと源太いひ (タル一五七)

白黒の馬で宇治川先手後手する墨へ水をさされて二番筆 (タル七八)

など作られている。景季は源太といい、その乗馬「磨墨」は黒馬であつた。

簞の梅

その年の二月には、平家と一の谷で対戦、梶原景時、景季は範頼軍に属し、生田森、東



門から攻め入り、一時退却したが、景季が見えないので、景時は再び柵内へ入り探し求めた。景季は簞に梅の花を挿して一人で戦っていたので、それを連れ出したのであつた。

梶原も簞の頃は花があり

(タル一五七)

宇治川のおくれ生田の花やさ (タル七二)

我陣へ入れば簞に枝ばかり (タル七八)

太刀風に敵も簞の梅も散り (タル七八)

梶原の出世もうつぽ物語り (タル百十二)

宗任と梶原梅の文武也

(四二)

文道は筑紫武道は簞なり

(五九)

等々、それが川柳にも詠まれ、その時

もののふの取りつたへたる

梓弓

引いては人の

かへすものは

と歌を詠んでいるので、

歌陣にかはる簞の梅の花

(タル八四)

という句もある。

この梅の枝は、生田神社の梅ということになっているが、浄る「ひらかな盛衰記」では、出陣の際神崎の遊女梅ヶ枝が、筒に生けてあった紅梅を梶原の簞につけたと作られている。そして景季は簞を質に入れてあったので、それを受け出す三百両が、梅ヶ枝が手水鉢を杓で叩くと出てきたと書かれている。

源太が鎧組打の料に替へ

(タル一二)

組打は、梅ヶ枝との情交をい

げじくを見ては梅ヶ枝鼠な

き

(タル八七)

梶原の紋は矢筈二枚の梶の葉で、ゲジゲジに似ていた。また、梅ヶ枝が手水鉢を叩いて

出てきた三百枚の小判を拾う芝居の様を、

手水鉢ふたれた上で金を出し

(拾九)

八両の外は読まずにひろいこみ

(タル二九、三四)

(拾九)

梅ヶ枝のさわぎ葉蘭がらりに

川柳歳時記 (2)

水谷竹莊

秋の巻 (一)

全国の名物と川柳行脚余聞

大阪の名物と秋の魚

全国の名物と川柳行脚が非常に人気がよくて、沢山の柳人や、その外多くの専門家から色々と参考になるお便りを頂いた、又、高知支部の川竹松風氏からは、土佐の名物、皿鉢料理の鯛の生づくりの写真を送って下さった。

全国の名物書いて、かんじんの大阪の名物書いてんかいな、ある有名な料亭から「べんうちへ来て試食して見て下さい、そしてぜひ書いて下さい」と持ち込まれて

(タル九一)

なり

梅ヶ枝は利息にとんと気がつかず

(拾九)

梅ヶ枝はおもとの実まで拾ひこみ

(拾九)

梅ヶ枝はそれから飯をはつくひ

(タル三二)

などと詠まれている。

しようもないところも名所に
にしてガイド 迫木
方言に訳してガイド笑わ
せる 喜楽

終点へ近くガイドのコン
バクト 紅山

ところで大阪市内の飲食店は商業統計調査によると、約一万一千五百店、市民五十世帯に一軒の割合で年間売上、百九十六億円、そのなかで、酔い倒れ、食いだおれの両横綱は、何んといつても南と北、明治のはじめ頃、千日前一帯が墓場と仕置場で、心齋橋筋は大正末期では、うどん、すし、まんぢゅう屋などの店がわずか五六軒きり、あとは大衆性のない呉服町だったそうだが、文明開化の明治中期頃までは、曾根崎附近には、うさぎやきつねが右往左往してた野っ原だったとはうその様な本当の話だ、それが現在では毎年、新規、営業があとをたない程、あ

るといふから、大阪の食い倒れといふのも、無理はない。

さてその食い倒れの大阪へ集ってくるネタは、昔から明石の鯛、泉州のカツオ、堺の車海老、熊野の鯨、紀州、淡路の鰻、赤貝、吉野の鮎、天満の大根、毛馬の胡瓜、市岡の水瓜、天王寺のかぶらなどが有名であったのだから、現在では、大阪の台所、「中央卸売市場」へだまっけていても、北は北海道から南は長崎までの本場ものが年中はんらんして大阪市民の食欲をみたしてくれている。

上方の誇りを捨てずのれん継ぐ 落帯

食べもの界の「有為転変」ははげしい。大阪でも戦前から生きのびている、「のれん」有名料亭は北の五料亭、鶴家、灘万、吉兆、堺卯、花外、しかない。

昔、大阪人にはなじみの深かった、沖すき丸万の魚すきも戦後影をひそめ、出雲屋の、まむしも昔程、はやっていない様だ。現在昔の伝統の粋をつづけている店に、茶懷石料理の「吉兆」、天王寺広田屋の豆めし、などがある。

創業は明治初年というのれんから金時色の顔が出る 陽子
仕出し屋ののれんに鯛がはねている 定月
(つづく)

春秋筆雜



アメリカ旅行 での句

河村 日満

雲の上ばかりの旅に寝る
余裕

羽田を立ったのが一月十七日午後七時過ぎ、東京の夜景の美しさもほんの束の間で海に出てしまえば、後は雲の上ばかり、飛行機に乗ることが初めてなので、相当に気負い立っていたのですが、雲の上ばかりでは気分満喫とはいきません、読書かさもなくは眠ることしかない機上で作品です。

How do you do へ顔を
かくしたタコマ富士

タコマ富士は富士山より二千呎（約六〇〇米）高い山でシャトルの日本人はレニヤール山というよりこの名で自慢している。私達が案

内をされた時は、その麗姿を雲にかくしてはつきり見せてくれなかったのを私は私なりに本家が来たのでと、茶化してみたまでです。（はじめましてへ顔をかくしたタコマ富士）

シャッターへ子等呼び寄
すも旅ごころ

これはアナポリスのとある映画館前で出来た句で、アメリカの土を踏んでから少々ホームシックにかかったという頃かも知れませんが。

日満らしからぬ句だと批評されそうでもまだ何れにも発表しておりません。こんな面のあることも御承知おき下さい。

咽喉もとを刺身日本の味
ですぞ

ニューヨークの日本人クラブでご馳走になった時の句で刺身まであったのは驚かされた。ここの味はアメリカ随一で、他の如何なるところでも味わえないもので

した、同じ時の句に「日本の味をお金を取り寄せる」というのもあります。

賃金は男尊女卑とくつが
えり

ボストンのハーワード時計工場でのことで潰れかかった企業といえる程、惨めなところでした最低賃金一、二五ドルでは男は来てくれませんとの経営者の言葉は私の耳底に永久に残ることでしょう。（註アメリカの最低賃金は一ドルと法律に定められており一、二五ドルはこの工場での最低保障額です）

アメリカの風邪も土産の
うちに入れ

暗黒街で有名なシカゴで出来た句で、ここでは零下三十度余り、一時間ほど市中を歩き廻り、五大湖の吹き下しの風をもらったもので、金欠と慾けを比喻してみました。ひとに云わせると、この句が一番素直だとも云いますが果して、

よろめいてみよかも四十
日の旅

二月二十五日（火）曇と日記にあるので、この日の作に間違いはないようです。然しこの日はエジソン電気会社と午後は火力発電所見学で、こんな句が浮ぶはずがなく夜間はユナイテッド機でサンフランシスコに十時すぎに着くという忙がしき、おそらく誰かの話にこんな句が生まれたのではないかと

と首をひねってみております。

薄頭漫語

西川 晃

最近、といつてももう大分なるが「ロマンスグレイ」という言葉がはやり、続いて「四十八才の抵抗」が流行語となった。

男性も四十を過ぎて漸く頭に白いものを交えて来ると、人間も円熟するし、些かは財産も出来、地位も安定するという訳で現代の若い進歩的な女性にとっては、金と力の伴わないハンサムボーイよりずっと魅力があるらしい。そこで此のロマンスグレイが若い美男子を圧倒して、今や実質的に男性の王座を占めようとしている様である。

さて私も当年満四十五才、年令だけから考へると、当にロマンスグレイのその又絶頂ともいふべき時期に当るのだが、どう言う廻り合せか一向それらしい事件に出会わない。尤も私は現在の賢妻と愛児で充分満足しているから仮令、美人コンテストで一位になった様な麗人から熱烈な求愛の言葉を受けたとしても、断固として辞退する心算でいるのだから問題はないが、それにしても私と同輩の男性が大いにうら若き女性の憧憬の的になっていると言うのに、私だけがほんのかけらもその様な傾向

がないと言う事は、除け者にされている様で面白くない。

先日（愛人邸へ赴く途中寄ったらしいが）私の所に自家用車を横着けにして突然やって来た同窓の某商事会社社長の日君の談話によると、同窓各氏の某方面での活躍もすさまじいものらしく、とに角もてる年令なんだそうである。いろいろの実例を挙げて、再び訪れた青春を誇らしげに喋々と語る彼の言葉を、小さな家庭以外の幸福を見向きもしないで来た私は、感嘆久しうして大いに拝聴した。

彼は私の享楽のない生活を、私は彼の生命に目覚めない根無草の人生を、お互いに憐れみあいながらも一方では私は彼の自由奔放さを些か羨望し、彼又私の生活の中から彼にない何物かを見出して暫らく沈黙しあったものである。やがて柿々と私が「俺には一向にそんな経験がないんだが」と言うとな彼は一当り前じや。お前の様にこんなところで燻つたらあかんわ。それにその頭でわなあ」と私の薄い頭髪を見上げながら、自分のたつぷりある黒髪を撫で上げて見せたものである。

成程彼が言う通り私には「ロマンスグレイ」のグレイが無い。全然の丸髪と言う訳ではないが、頭のてっぺんの禿を隠して絹糸の様に細い毛がいつも哀れに凋落の日を待っている状態である。

然し老衰した頭髪に抗うように

未だみずみずしい青年の純情を多分に持っているつもりだからアチヤラ語で言えば私などは「センチメンタルライト」とでも申すべきか。

センチメンタルライトが美人の心臓をかきむしる時代は未だ来てないらしい。

これも最近の事だが、賢妻の友人の御亭主が初めて私の家を訪ねて来て、店に坐っている私を妻の父が良夫かの判断に迷ったらしい「何と挨拶していいものやら冷汗が出た」と帰ってから奥さんに告げたそうだが、是には流石に私もギョギョツである。

九ツ違いの父つあんとはいくら何でも殺生だと思ふ。アチャコなら「そらあんな、ほんまに無茶苦茶でござりますがな」と言うところであろう。彼に会ってこの話の真偽の程を確かめたいが未だ機会がないので、現在のところ事実と認めておくより仕方がない。

親娘と間違われたのは始めてだが「奥さんはお若いすな」とか「お年の割に小さいお子さんがおありで」と言う様な事は良く言われる。別に憤慨する程の大問題でもないが、余りちよいちよいこんな事を言われると、妻に、年寄の亭主で我慢してやっているという錯覚をおこさせて間違った優越感でも待たれると大変だと思ふ。対照の妙によって自分が些かでも若く見える事に感謝すればいいのだが、そこはそれ女の浅はかさ……

おっとつと失言。これ以上悪妻の実をあげられると私がやり切れない。薄い毛を未練たらししく伸ばして時々高価な毛生薬を塗ったりしてより、どうせ先祖からの禿筋だからいっそスバツと剃っていったらと妻に相談したら「そんな事したら妻は一体どうなるの？みつともなくて一緒に歩けますか」と叱られた。

妻の意気込から察すると私の頭は現在の枯すきから夜店のステッキに移行する運命を迎えるだろう。此の文章を書いていると傍のラジオから金語楼の漫談が聞えて来る。

不思議な縁に驚いて耳を傾けると、禿頭を看板に盛んに爆笑の渦を捲起している。頭の毛の少いのは笑いの種になってもロマンスとは縁がうすい様である。

ソクラテスに似た禿げ方
で古本屋

川柳の壁

宗高矢寸志

川柳の壁

詩稿を入れる袋を詩囊というが、人間臭い川柳人のは合切袋とでもいう方が当たっているかも知れない。この目で見たもの、この耳で聞いたもの、身を持って体験したもの、玉も石も一緒に放り込んでおく袋……。時々その中味をぶちまけて、選別や加工を施して

川柳に仕上げる。作句意欲の旺盛な程、合切袋の中味の補充は忙がしい、作句は流れ作業だから、材料の補充が停つたらお終いだ。合切袋がべしやんこになった時が川柳の壁だ。空っぽの合切袋を背負って立上るより仕方がない。無から有は生まれないから……。材料集めは地味な仕事だからといって、昨日と同じような目でがらくたを詰め込んだのでは、生まれる川柳にも飛躍はなく、壁の手前で足踏みをするようなものだ。川柳が人間陶治の詩であるならば、壁はその試煉であろう。冷厳な壁を叩いて悲しむよりも、それを乗り越える工夫こそ必要であろう。

川柳の花園

川柳の壁の向う側に果して川

柳の花園が存在するであろうか。私にはそうは思えない。人生そのものが壁の連続であり、川柳の壁は七重にも八重にも取巻いているものではないだろうか。その壁を一つ一つ乗り越えていくところに飛躍があるのだ。昨日の句よりも今日の句、今日の句よりも明日の句が進歩していないならば、人間陶治の意味があるろうか。エバーオンワード、限りなき前進あるのみだ。人間陶治にゴールはなく、従って陶然として句作を楽しむというような別天地はない。人並の頭を持っている人間なら、川柳を三十年やれば免許皆伝の巻物が貰えて、座して呪文を唱えれば名句がざくざくというようなことなら、

これを川柳の花園といってもよろう。しかし余りにも甘い夢というべきであろう。「一生に一句を残せ……」一句は十句ではない。一句は十句の一句ではない。せめて一句でもという意味である。川柳の花園など存在しはしない、勿論到達した人もない。川柳の壁の向う側には、今迄と同じ階段が続いているに違いない。益々高く、益々急な、無限に続く階段が……。

新しさと古さ

川柳には十

七音字中心という制約がある。川柳を志した当初から私達はそのワクの中で生活している。その小さい、狭い住家が魅力であるのだ。この型式が最も川柳の本質にぴったりするからであろう。僅か十七字でもって表現するのであるから、表現法も自ら制限され典型的になり易い感みはあろう。しかし新しさと古さとは、その句の内容が決定するものであって、外来語を使ったり、目新しい表現を工夫したからといって、新しい句とはいえない。内容こそ最も優先するものである。合切袋の中味が問題だ。表現方法はその中味を最も適確に表現する方法なのであって、「……しようかなと思ひ」とか「……と思ひ」が句主にとって最も適当と思われたら、それでよいではないか。いくら表現を新しくしたところで、それで句が死んでしまつては何にもならない。そういう句に吐き出

すような嫌悪感を感じるのとは、その人のレベルが高いということだろうが、各人柳歴が異なり、能力も違っているのだから、自分がその段階を既に超越しているからといって、無闇に嫌悪すべきではない。その人は今、そういう壁に当面して苦吟しているのだとむしろ励まし、親切に指導してやることこそ、先輩の慈悲であらう。この川柳こそ新しい川柳だというものは、そうあるまいが、あつても内容的であつて、表現は余り変らないのではないか。要は合切袋の中味を新しくすることだ。感覚の新しい目のみが新しい素材を発見し、新しい表現を導き新しい句を生む原動力となるのではないだろうか。十七音字中心というワクやその表現型式に壁を感じるのであれば、自由律川柳なり、自由詩の世界なりで思う存分羽根を伸ばすより仕方がない。

こりと痛みに
サロンパス

久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪



入門講座

研究題「値切る」

戸田古方

「値切る」と「値引き」とはちがいます。「値切る」は買手のいうことだし、「値引き」は売手の方からいったことばです。

研究題は「値切る」ですから、一応買手側から見た句ということになります。自然さんは

値引して聞いて話の面白

さ

値引して売る心算の符牒

つけ

という句をよせていられますが、第一句は「値切る」には直しにくい句です。大風呂敷を据げたような語を額面通り受取れないので、割引して聞くという意味で「値引き位の言葉はつかえても、「値切る」とはなりにくいのです。

「値引して」の「て」と、「聞いて」の「て」は重なってはいませんが、かえってリズムを感じます。

あとの句は

値切られて売る算段の符牒つけ

とてもすれば「値切る」ともなります。「値切る」は受身にすれば売手側からの句も出来ることになります。

歌子さんの

快よう値切られといて手を抜いて

これも売り手側のたくましい商魂というか、割り切った商魂というか、穿ちの句ですが、穿ちとしては月並で、もう一つというところですが、多く集った句がほとんど小売商人と消費者の関係を取扱っているのに、この句は少くとも注文製品のように、見方によるととと大きな取引とも受取れます。業者間の大量取引ともなれば、手を抜くといっても素人ではないからそう簡単とも思えないし、消費者に皺よせする馴れ合い

とも見え、仲々複雑な内容をもつてくることになり、その点で大へな面白く拝見しました。

もう一つ変り種は

値切るのに賠償案は大きく

出く

静観堂

と舞台が政治、外交の世界に張り出して来ているのです。同じ値切るにしても桁も、金額もちがうことが「大きく出」の中に生きている。

もう度々申したことですが調子が作句上とても大切なものでありまして、これは必ずしも十七音字の枠ということだけではありません

デパート(が)値引しない
と里の母 八文銭

買わぬ氣(が)値切った金
魚三日生き 駄目八

値切る人も客種の内植木
市 句念坊

品物(は)ほめて半ばは負
けときや 園男

各句の右に書いた語にかえるか、語を挿入しますと、上程読みやすくもなり、句としてもよくなると思っています。

即ち「デパートが」の「が」を「は」にします。「が」も「は」も主語のあとにつける語ですが、

日本語の使い方としては「は」の方が自然であるようです。その上「は」ですと「デパート」というも

麻生葎乃著・米田三男之介装幀

福壽草

定価二百五十円

送費 三十円

菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

郵務口座大坂七五〇五〇番 電話住吉(四)六〇八一

のは値引しないものだ」という通念を言外にはつきりいわせることも出来るのです。

第二句、「買わぬ氣が」と「が」にしますと「買わぬ氣」が主語となります。「買わぬ氣で」とすると、「値切る」の副詞のような働きをします。したがって「値切る」を強く生かすためには「買わぬ氣で」とした方がよいのです。

第三句の「値切る人」と「客種」の間に「も」を加えることは句をスムーズにします。「も」のない方が一寸変った味が出ないともいえないのです。

第四句の「品物は」とすると、これも主語になりまして、品物をほめるのは買手ですから、「ほめる」目的にならねばなりません。「品物を」とすべきです。

値切るのに友人二三連れ
て行き 十七
ガマ口をあけたりしめて
又値切り 美舟

初めの「友人二三連れて行き」は音字からいえばちゃんと合っているのですが「連れて行き」の「行き」をおくよりこれをとり、「二三」を「一人二人」として「友人二人連れ」とすれば句調もよくなるし、それで充分に意もつくせるのです。

あとの方は「あけたり」というておいて「しめて」と切ってしまうと舌足らずの感じがします。「あけたり」というなら「しめたり」とすべきです。中七の七にこだわらずにすぎたようです。

ハンドバッグ迷える心バチつかせ

という名句を御紹介しておきます。次は、さき程の「値切る」「値切られる」のことですが

値上げして値切った方が

売り易い

村調子

これも中七の七にこだわられたんじゃないかと思えます。値上とは売り手のこと、値切るのは

買手の方で、このままでは句意がどこにあるのかごちゃごちゃしています。中七を「値引した方が」とするか、「値切られた方が」とでない句になりません。調子がよすぎても、ただそれだけでは軽薄といわねばなりません。謎のように人におぼえられていく句が必ずしもよい句とはいえないのです。

即金にものをいわせる値

切りよう

八九寸

一円を値切る女の口達者

豊年

一応は値切らにや買わぬ

市場籠

周甫

これらはあっさり軽く走りすぎているが、初心の方にはうまいとも見えるかもしれませんが、格調の高いものは感じられません。同じようでも

多勢には勝てず金魚屋ま

けて行き

一鶴

斜陽族と云われ値切るこ

つおぼえ

どんたく

子を抱いた方にあっさり

値切られる

保夫

四天王寺値切った壺は大

きすぎ

悟朗

の諸句は穿ちの句でありますか、何かアクセントがありまして、余韻を感じさせます。

「多勢」「こつ」「子を抱いて」などがそのアクセントです。

最後の「四天王寺」句は今度拝見した中で私が一番魅きつけられ

ました。市場の買物、夜店のひやかしという「値切り」の句の中でこの句にはそうした「値切り」以上の雰囲気が出ています。いい意味の軽味も感じられます。ここからはじかに人生陶冶とはならないにしても、「値切る」という課題を通して、ほほえましいあたりの

私の作句法

小西無鬼

私の作句法はこれ迄皆さんお書きになったのと同小異で特に取り立ててこれという変わったものはありません。

ただ一つ変ってるかと思う事は、推敲には用便時を用いる事が多いと言う事でしようか、(笑わな

いで下さい)句帖と鉛筆も必ずお供する事になっていきますから、時には句も生まれる事もあります。

大体私は寡作の方で、もうもり湧き上る程の詩情の持主でもない様で、何かヒントを得た時は直ぐにノートか句帖に書き溜めます。

一番よく作句欲が湧くのは(極自然に)出張とか旅行とかの場合で、よく出張した頃は往路は川柳雑誌を味読、帰路に作句する。或はその反対にやる等を繰返しました

何と云っても一日同じ机でペンを握っている私には同じ道であつても窓外や、世相の移り変りが目につき新しい空気を吸った様

空気を含めて私はおすすめしたいのです。

○

研究題 まんなか

発表 九月十五日

投句先 豊中市本町三丁目二〇一

戸田古方

に生き生きとした気分になるからです。

これが浮き浮きした気分に通じるのか春は花、秋は紅葉と変るローカル線の車中にも大変楽しい思いがして勢い作句欲が湧いて来ると云う沢です。

うかつにも閑屋に席を譲りけり

出張に調査も草の抱持ち

の如きがそれであります。で直ぐに一応句帖に認めます、句帖と柳誌とは何時如何なる場合も私の傍から離しません。町内を歩く場合も必ずポケットに在りフト浮ぶのを自転車止めて認めます、勿論投句迄の間に入る迄推敲します。

時事吟等は不向きだと思つています、感受性に乏しいのかも知れません。

商魂というが動亂見のがさず

等は朝鮮動亂の時の句で、田舎住

いの私としても余程感した時だった訳です、それよりも

もどかしくなれば朝鮮語で話し

の方が私の句でも好きな句です。

声を大にしては云えませんが執務中でもこれ迄溜っていた何かのヒントの一つが縁に触れて一句生れる事もあります。直ちに書き留めます。

以上は割合句の生れ易い時の状態を述べましたが、どうしても句が浮けない生れない時は如何するかと云う事が眼目でしょう。私は次の様な方法をとっています。

「切りは迫るし句が殆んど出来ていない(決算とか家庭的或は社会的出来事に対する悩みとかで)」といった様な場合が誰しもある事と思ひます。こんな時はあせりが

出て、何とか十句位生まねば投句が出来ない淋しさにかられるものですが、こんな時は私も皆さんの例に洩れず先ず柳書を読む事にしています。

ここをあせて何でも数句を、と、暇を見つけ句帖と鉛筆を前に黙考してみるも鶏が卵を生む様にそう易々とはゆきません。鶏でも中々いきんで一卵を一つ生むんだからそう安々と佳句が、コロコロ生れる訳はない。でこんな時は全然作句を忘れる気持でラヂオのおもしろい所とか罪のない軽い読み物とかを一寸みて作句難のいら

らした気持を一時的に没却する様に務め、悲歎したりはしません、又良書による秀句の観賞もします。

詰まってきた気分をほぐす為であせて「下手な鉄砲も数打ちや当る」式の玉石混淆の句数さえ揃えれば、と云う様な事を初心時には考えた事もありましたが、(恐らく誰かがやるでしょう)そんな射倂的な考は只今ありません。

で五句しか出なければ五句を投句して内一句でも選して頂ければよいと云う考えで投句をしていますので、入選が一句でも全没であつても喜愛に大きくは響きません。

無論入選句の少い時は静かに投句に対して反省します。そして闘志を(言葉が悪いが)燃やします。即ちこれでは「恥かしい」と。

ここで云う事は、全没であつたり相当数投句したのに入選句が少い。という事で川柳を止めてしまふ人が多いのじゃないか、と云う事です、私はそういう人は川柳を遊戯と心得ている人だと思ひます。

要するに私の川柳への信念は、細くともしっかりした芯のある川柳の綱は握つたら離さない事です。一本のロープに生命をかけるあの登山家の様な意気が川柳にも、もつともつとあるべきだと自分を戒めています。

高血圧と云われてから五年にもなりますが酒と煙草は人一倍多く嗜みますので何時倒れるかも知れませんが、世に謂う「倒れて後やむ」のでなく句帖と共に川柳はあの世へも持って行く、即ち「倒れても離さない」覚悟をしています。



女流作家に 與う

麻生 菫 乃

お蚕が糸を吐くように、人間が感情を吐露するのは本能である。小鳥が囀るのも、虫がすだくのもみんな、感情を音によって表現したものである。赤ん坊の泣声も空腹を訴える時と、おしめが濡れている時とは、泣声が違っていると、ラジオでもよく聞かされる事であるが、猫にしても、彼女を呼ぶ時の声とライバルに挑みかかる時の声とは物凄く開きがある。

「うちの猫は何でも私の云う事がようわかりまんねん」と喜んでゐる奥さんがあるが、あれなどは全く飼主の自己満足であつて、猫の方では「おおきにはばかりさん」と云っている。

言葉と云う共通性の符牒を持たぬ世界では、発声法によるより外に方法がないので、音の高低とか、アクセントに物を云わせた訳である。言葉は通じなくても、アクセントのつけぐあいで、猫はちゃんと、こちらの感情を受取る事が出来るのである。ところが人間は人智が進んで来るに従つて、

なければならぬアクセントも、リズムも、みんな出場を失つて、衣冠を正しく散文体となつて表われるようになったのである。

子供がよく、手を叩いて遊んでいる時に彼等の囁し立てている言葉を聞くと、それが期せずして立派に音律をなしている事を発見する事がある。これで見ても偽らぬ感情の表現は自然に音律がともなう事を証明している。調子がとどのわぬと云うのは、思念に純粹性を缺いているからである。感情が

素直で単純であつた昔は、日本でも、英国でも印象に残り易い韻文体が発達したのであつた。散文体はずつと後に発達したもので、詩型文学は実に文学の母胎であると言つてもよいと思う。

川柳が他の詩型のものとは区別される点はその内容に構成している要素にあるのはあるが、十七音字を基本として作句している限りは調子を尊重すべきである。句はリズム

義である。全々調子を無視し、内容だけをとりあげて、句の優秀を競うのであれば、別に川柳を作らなくとも、簡潔な小品文で事が足りるわけである。調子は句材を生かす化粧法である。金泥集の作家達は大いに、女性特有のおしゃれ気を作句の上に働かせて欲しいものである。

★

女流作家の寄稿を待ちます。せまいながらも楽しいページにしてください。(編集局)

金 泥 集

麻 生 菫 乃 選

課 題「赤ちゃん」

天

地

人

五 客

赤ちゃんをお獅子にかなで貰うたり

阿 茶

番台があやしてくれてママの風呂

葉 乙 女

保育室八等身になるもある

阿 茶

可愛がりすぎて赤ちゃん泣かせ

都 詩 子

御機嫌が悪い赤ちゃんのエキストラ

き さ 子

赤ちゃんを笑わす顔は別に持ち

風 の 子

お祝に行けばおまつを替えて見せ

吟 女

ハイハイはおしめをいれてよいきげん

阿 茶

平 拔

赤ちゃんが笑うてくれた僕の云

き さ 子

へちま棚に風あり赤ちゃんよくねん

同

赤ちゃんへもう保険屋のプロポーズ
赤ちゃんの汗へ忙しい天華粉

知 恵 美
同

赤ちゃんの発声マンマから覚え
注射器と知らず赤ちゃんのかみ

葉 乙 女
阿 茶

赤ちゃんを番号で呼ぶ産院

吟 女

赤ちゃんの昼寝に母の忙しさ

風 の 子

赤ちゃんが泣いて夫婦口をきき

都 詩 子

不義と言ふ名で赤ちゃんは捨てられる

そ と 枝

赤ちゃんのおねえ犬にも云い聞かせ

ひ さ み

赤ちゃんが寝たので小言ひかえさせ

あ や め

赤ちゃんが出来て三つの姉はまき

陽 子

赤ちゃんをいじめる手から手へたり

初 穂

赤ちゃんをほめて一口口入させ
優良児と言う赤ちゃんを見せ歩き
赤ちゃんの寝顔ついで叱られる
赤ちゃんがぐさびごなつて生れて来
赤ちゃんは母に預けてレッスン場
女の本能赤ちゃんのパフを持ち

知 恵 美
銀 子

赤ちゃんを女中にいさせ三味をもち
片方も押え赤ちゃん乳をのみ

千 代 美
奈 良 子

赤ちゃんに似た子とほめられてはつこする

浪 寿

赤ちゃんが寝てアイロンと洗濯機

沙 智 子

赤ちゃんがオムツを下げて世帯じみ

白 美

赤ちゃんが泣けば飼猫猫び上り

清 子

赤ちゃんは泣くのが仕事とほつこされ

と よ

赤ちゃんをいじめる所を先ず褒めて

史 子

赤ちゃんを可愛いいお手々ほめておき

一 栄

初めての赤ちゃんこわく抱いて見る

玉 枝

赤ちゃんの気嫌へババの百面相
子福者に又赤ちゃんが生れて来
赤ちゃんののためにすげない人といふ
人形のような赤ちゃん欲しと云う
赤ちゃんの部屋一つはいに朝日さす
広告へ赤ちゃん丸くはねて居る
赤ちゃんへ義理でしめを替えてやり

周 甫
若 芽
悦 子
た つ よ
文 女
美 音 子
小 菊
美 丹

私の作句法

土井文蝶

作句法の公開ですか。これが商業のことなら、そう簡単に商品の製造法は申上げられませんがね、可々。

川柳もその作句法を言つてしまふと皆んな上手になつてしまつて、文蝶の影がうすくなつてしまひますね、だが一つ聞いていただきますまいか。何もむつかしい事はありません。むつかしく考えろとダメですね。朝起きてから寝る迄が川柳ですよ。何を言つてのだと、お思ひになるでしょうが、まあ、お聞き下さい。川柳の素材はどこにでも、転がつてますけど、素材は一本の線にすぎません。

線を何本並べても線で、川柳にはなりません。皆よく言われます、あの多読多作。私は違ひます。多読多作です。なぜつてよくお考えください。いくら多作と言っても線の延長みたいな、句をいくら作っていても上達はしません。素材が一本の線としたら、それを自分の実生活に直結して、発展させ、育てて一つの完成した句に、

天下の險を
越える句

—大萬川柳のこと—

毎月十八日ごろ、大万川柳の松江梅里氏が路郎先生を訪ねられる。いうまでもなくその月の選を頼みに来られるのである。

先生のお仕事の都合で、その日その場で選
をされることがある。

先輩梅里氏とボクが寄れば、女三人寄るよりも、にぎやかであるが、サテ先生が選をされるとなると、先輩梅里氏の顔がグツとひき緊まる。気の弱い先輩など心臓がドキドキするのである。

梅里氏の麗筆による無記名の句箋が、フワリ、フワリと机上から落ちる。これが没句のご臨終のすがたなのである。それをボクがデイネイにそろえていくのだが、その一枚、一枚にボクの句がないたび、助かった、助かったという気持は、(ちよつとイカスぜ)である。だが四枚もフワリフワリの中へはいると、頼みの綱はあと一句きりなので、まったくそんな時は生きたそらがしない。

箱根の関所には抜け道があつたそうだが、先生の炯（けい）眼はそれをゆるさずである。

安宅の関の富樫が、弁慶の白紙の勅進帳へ青信号を出したが、大万の関は先生がガンばっておられる以上、佳句という通行手形がないかぎりには罷り通れぬのである。

関所に抜け道がないときまったら、抜ける句を作るより道がないということになる。

(不二田一三夫)

まといめる訳です。

実生活に直結すると云う事は、つまり、川柳とは生活を離れて成立はしません、そんな事は判つてゐるとおっしゃるでしょうが、まあ聞いて下さい。かりに題詠なんかの場合、「洋服」と云う題が出たとしても、その時は自分の生活の中から、洋服を川柳に成る様な事がらを考えてみます。つまり發

展さす訳です。育てると云う事は、掘り下げる事です。掘り下げると言っても、深刻な顔してこめかみに青筋立てて、人生五十年がどうしたとか、半生とか、そんな水い間の事を十七音字に、まとめるという事は無理です。小説でも、あの「花のれん」読まれましたか、人妻になってから死ぬ迄の苦勞を書いていますけど、二百五十八頁もあります。字数にしていくら程あるのか知りませんが、相当手間がかかります。その段川柳は十七音字を要領よく一寸した事をつかんで句にまとめる。これが私の作句法です。雑吟も同じ事に要するに物を見る眼を、養う事と、良い素材を見つけて、よい表現が出る

来る技巧を身に付けるのですね
ですが、技巧にとらわれて直実を
忘れてはなりません。他人さんが
よく言われるように、題吟は作句
練習だと。そうばかりも言えま
せんね。題吟は題を通じて生活
を詠んで居るので人真似や、当込み
は止めるのですね。そんな事をし
ていたら何年経ても自分の本当
のものは出て来ません。

では、雑吟は、あれ本番です
か、雑吟でもなにか、中心になる
物はありますよ。私らは題吟でも
雑吟でも皆本番です。そんな気持
で勉強をしています。そうそう句
会は、あれは作句練習だと思つて
行くのだったら止めとくのです
ね。句会は真剣勝負の場所で、練

習なら家でやりなさい。句会は日頃練習した腕前を試しに行くところですから熱が這入るのです。句会へ行ったらベテラン連中が大勢来っています。それらの強豪を抜いて、栄ある不朽洞賞を獲得した時の気持は、格別なものですね。安易な考えは捨てて真剣に、どしどし句会へ来て下さい。お互に勉強しましょう。

結局は熱と努力で押まくることです。 一九五八・七・三十一

★

(七月二十九日午前六時頃、交通事故で腰部捻挫で寝ておられる中を、とにかく責任だけを果すと「私の作句法」を寄せられた)

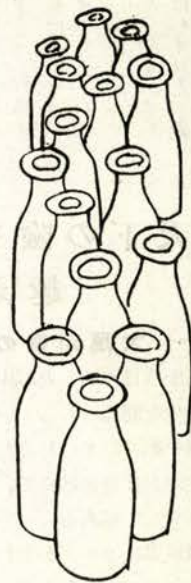
— 編集局 —

結局は熱と努力で押まくること
です。一九五八・七・三十一

二十九日午前六時頃、交通部捻坐で寝ておられる中、
「句法」を寄せられた）
—編集局—

— 編集局 —

集路一



教え子

宮田不二選

前 抜

教え子が現在の妻です頭かき 銀子
 教え子がつけたあだ名でまだ達者 兼治郎
 教え子と証人台で会う 悲劇 岳詩
 教え子の仲人をする趣味に生き 保美
 そういえばそんな子も居た老教師 三四郎
 もう禿げた教え子もいるクラス会 実男
 教え子が機を飛ばして遺児救い 夜潮
 てこずらせていた教え子の賢母ぶり 箔川
 教え子の表彰見入る 社会面 淀月
 教え子の嫁の世話までさせられる 豊年
 先生の結婚女の子がさわぎ むしな
 あれは教え子でねーと先生鼻高し 雄声
 教え子の成年茶菓子で済まされず 藤波

教え子と唄を歌えば 若返り 七面山
 教え子の声援を背に師は 走り 幸路
 教え子に思わぬとこでふと出逢い 祥月
 教え子の舞台へ一人うなずける 魑光
 教え子に今の世相を教えられ 狂二
 教え子の笑顔へ明日の希望湧き 美音子
 教え子が学者になった講義きく 光郎
 教え子と一緒へ妻の信いきり 白溪子
 教え子の会社の庶務の隅に生き 静馬
 秀逸
 教え子であり友達である 若き 恵二朗
 教え子の娘の姿をまぶしがり どんたく
 教え子に葉のムチが批判され 井蛙
 印象に残る 教え子 天折し 十九平
 教え子の善行私の名も書かれ 九呂平
 教え子の出世へ新聞記者が来る 圭水
 教え子の不幸は時代のせいにする 雄々
 はすかに座った教え子に目をみはり 敏子

教え子のいまだに四季の便り呉れ 蜻蛉
 クイズから教え子だった事が知れ 保夫
 教え子の方が上手な年賀状 美由起
 平凡な生徒だったとだけ覚え 牧人
 教え子は面影どこに残って居 庸佑
 教え子につがれる酒へ酔いつぶれ 芳仙
 教え子の風の便りのふし合わせ 保夫
 教え子の校歌に教師 魑えり 代仕男
 教え子が結婚写真を送って来 陽子
 教え子へ敬語を使う年令になり 愛鳩
 教え子に少しパチンコ玉もらい 虹要
 ベンチャラでない教え子の便り来る 笑太
 十傑
 教え子が一足お先に姓を変え 敏子
 教え子の出てる新聞妻を呼び 句念坊
 分校の教え子みんな食しい子 葉光
 教え子の遠慮が足をくずさない 白溪子
 教え子が巢立つ嬉しい淋しい日 恒雄
 教え子だから信用をした手形 昌男
 教え子を叱って妻に叱られる 京太郎
 都会にもなれたと教え子便り来る 一鶴
 若き日の理想教え子で実り 罔男
 五客
 教え子に会ってわが年令意識する 圭水
 教え子に一票入れる杖をひき 恵二朗

色紙短冊
 書畫用品
 大坂戎道
 丹月堂
 中セニセニ

人
 教え子の名前を妻が覚えてい 幽谷
 教え子は皆チヨボチヨボでいるらしい 殿
 教え子の子供を孫のように抱き 句念坊
 地
 教え子はいいいな賀状を並べて見 虹要
 天
 教え子の出世へ過去を語らされ 奈良子
 軸
 駈けつけた教え子医師の顔となり 敏子
 指輪
 教え子と語れば昨日の事のように 不二
 喜寿米寿教え子の顔有難し 同
 河村日満選

母の日に母にもあった金指輪 周甫
生前にはめてた指輪見当らず 十七
税吏だとわかつて金指輪をかくし 幽谷
印指輪大きくはめてよう 儲け 恵二朗
今度目の満期で指輪買うと決め 悦子
万一のときに指輪値ぶみされ みのる
借り物の指輪貴婦人らしい見せ 岡男
思い出の指輪となつて子は育ち 豊年
焼香へ二号の指輪 よく光り 隆文
まだ箱のままの指輪も出して見せ 蜻蛉
昇給へ指輪一つを 買う契り 一進
ウキンドの指輪の方を買えという 祥月
全快の況に指輪はめてやる 葉光
イミテーションに見えぬでしようと思 厩佑
似合わないものは遺品の金指輪 白水
貞操とかえたダイヤを指にはめ 実男
ブレゼントするに誕生石を撰り 進之助
母さんに貰められてる娘の指輪 狂二
婚約の指輪はめずと大事がり 美由起
サインする指輪模造とは見えす 牧人
はめられた指輪が悪を狂わせる 敏子
代償の指輪が光る 葉指昌男
田満退職女房に指輪買うてやり 保夫
指輪だけ取られ男のそれつきり 秀三
本物かと女給指輪をひやかされ たけお

指輪にもあれこれ迷う見合の日 晃康
エンゲージリングでもなし二号の座 銀子
板前の指輪浮気の数を秘め 芳仙
落ぶれて名残りを惜しむニカラット 淀月
指輪もう素直に通さぬ指のふし 愛鳩
お別れの握手へ光るエンゲージ 奈良子
母さんが死んだらやるという指輪 句念坊
贈られた指輪が運を左右した 岳詩
米をとぐ指には縁のない指輪 雄々
お役所のお金で贈った金指輪 箔川
この指輪ですかとどのろけきかされる 虹要
問題の指輪返すに骨がおれ 藤波
お掃除は女中がします金指輪 恒雄
よつどのボロイもうけのある指輪 一傘
吊り革に指輪見せたい手がさがり 光郎
写真にも指輪きつちり写つて居 魁光
思い出の指輪に後家の強い意志 春雄
桐箱で片見の指輪引きつがれ むじな
質縫いの指輪で参観日にも出る 漫歩
指輪もう肉へ喰い込む肥りよう 代仕男
倅せな指輪はずつと 葉指肇
菊一枚おすそわけする手の指輪 夢路
貧しさの指輪は心にはめておき 旭峯
皮指輪母の夜なべの針進む 華甫
指輪までほめい副会者如才なし 兼治郎

イミテーションの指輪の方がよく光り 雄声
指輪とや今の女も嬉しがり 不二
瞞まれた指輪と知らず見せあるき 圭井堂
ザーマスががいちいち指輪撫でて見せ 忠三
ダイヤセンドの指輪追つてるマリの旅 七面山
愛情を指輪で買った成上り 吉枝
賞状を指輪をはめた手で受ける 十九平
男嫌いなどと大きな指輪して 鯉
貧乏はしても指輪ははめており 殿
姉妹の不和は形見の指輪から 慈雨
全盛の指輪自慢で 姑がみせ 美舟
エンゲージリング恐妻になる顔でなし 恵二朗
指輪二つはめて二号は嫁ぎに出 初甫
臨終の指輪を狙う目が集い 美音子
万引をしたとも見えぬ金指輪 同
まじないの指輪歯痛を治さない 蘭
小道具の指輪自分ののを使い 同
佳句
闘病へ妻の指輪は手ばなさず 鳴恍
婚約も挙式も指輪なしで済み 保夫
膝枕指輪を抜いてはめて見る 夜潮
会える日の鏡で見てる指輪の手 晃康
借用証金の指輪を抜いて 捺し 井蛙
ぐすぐすの指輪ベッドで 弄び 三四郎
あの頃は似合の指輪とも云われ 南牛子

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
大田区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

指輪もう似合わぬ妻にしてしまい 保美
あの声でねだつたらしい金指輪 美音子
税務署への用は指輪を指摘され 不二
夏やせをわざわざ指輪とて見せ 白溪子
鑑定をさせてげっそりした指輪 圭井堂
再婚の重荷指輪を処分する 鯉
安物の指輪でも妻嬉しがり 東岸
パトロンの良さを指輪にまでも見せ 実男
十四金二号の指をきたながり 清人
鼻声で買つてもらったニカラット 箔川
金借りに行く日は指輪はずしとき 陽子
軸
刺青の指輪は蛇を噛み合わせ 日満

柳界展望



句会

▼本社川柳忌句会は九月七日(日)午後六時から下寺町光明寺で開催する。残暑きびしいとは云え、朝夕はめっきりしのぎよくなった。日曜日のことでもあり、浴衣がけで多数御出席願いたい。▼杏林川柳会(大阪市)句会は八月二十四日(日)午後二時、信貴山上、三楽荘で開催。▼ハワイ支部六月句会は二十日夕、ペンサコラ街マキキ荘で開催。席上、麻生霞乃先生寄贈の稽古用短冊を配布、短冊揮毫の練習をされ好評裡に散会された。

▼不朽洞洞友、亀井花童子氏の追悼句会(函館市)は、七月二十日(日)鈴木青柳氏外三十二名の参会者を得て、しめやかな中にも盛大に催され、故人を偲ばれた。

▼川維岡山支部句会は七月十二日午後二時日赤岡山支部で開催。▼平安川柳社(京都市)主催、夏を楽しむ会は八月十六日(土)比叡山根本中堂宿院で開催、本坊で一泊。翌早朝野鳥の声を楽んでから散会された。

▼ねぶた創立十周年記念大会(青森県)は七月二十七日(日)午前十時より富士見館で開催。▼大洲市本郷川柳大会は八月三日(日)盛況裡に開催。伍健、文庫、曉明、宵明、窓城、建朗、南牛子、故人各氏等出席。

▼川維倉敷支部句会(倉敷市)は八月三日(日)一時より稻原一善居で開催。▼川維明和病院支部研究句会(西宮市)は八月十七日

(日)鳴尾町新明和興業KK和室で開催。同句会は吉本善風氏が本年二回目の不朽洞賞カップ獲得記念句会。

▼竹原川柳会主催、第二回近県川柳大会は、九月十四日(日)十一時、竹原小学校二階大会議室で開催。兼願、酒、窓、手、皺、再会、別れ、立話し、(各題三句)投句料五十円封入の上、九月十日着便のこと。宛先、広島県竹原局区内竹原町竹原川柳会。

▼第七回東北川柳大会は十月十二日(日)午前十時、仙台商工会議所で開催。兼願、こけし、苦勞人、拳、仙人、待ったなし、偶像、半人前(各題二句)投句郵券七〇円封入の上九月末日迄に仙台市東八番丁一七〇後藤閑入宛。尚、川柳作品展示会も同時開催。

▼西日本川柳大会は九月十四日(日)午前十時弓削小学校講堂で開催。兼願、父、重役、夢、コンクール、市場、反省、(各題三句)投句料八四切手四枚封入の上、九月十日迄に着便。宛先、岡山県久米郡久米南町弓削川柳社。

消息

▼路郎主幹は七月二十九日、静養中の武部香林氏(大阪市)を見舞われた。

▼若本多久志氏(西宮市)は、最近国際ライオンズクラブ(尼崎)に加入された。右は世界共通の社会奉仕団体との由。▼速木真珠洞氏(福岡市)は八月京都を訪問、竜安寺や南禅寺を見物された。

▼福田路氏(高槻市)は七月二十二日、二十三日の両日、宇治へ出張、「夏最中百万弗の宇治の夜」との句信を寄せられた。▼米沢曉明氏(大洲市)は八月八日九州旅行の途次、関門トンネルで「三等車あるかなきかの扇風機」の句信を寄せられた。

▼相原一善氏(倉敷市)は盲腸手術後の経過良好で、七月九日から出社せられて居ると。

▼小田柳更氏(貝塚市)は八月一日をもつて千石荘療養所を退所された。▼水越幸路楼氏(金沢市)のおたよりによれば金沢市十一屋公民館行事の行事の内へ市内では始めての催し川柳グループを野村唐衣さん其他の方々と五月から発足させ新人の出席を歓迎し併せて北国柳壇への投稿をも呼びかけているとのこと、御発展を祈る。

▼北川春泉氏(大阪市)は七月末、家族連れで広島県へ帰省の途次、竹原川柳会の方々と交歓、愉快な一日を過ごされた。

▼丸尾潮花氏(大阪市)は八月十六日、下呂温泉、日本ライン方面を回遊された。下呂温泉から「温泉の浴衣で握る舞い扇」の句信を

寄せられた。

▼野村味平氏(加賀市)は、何かのスランプの息抜きのため、八月初め能登半島めぐりに出掛けられ、大伴家持ならずとも、和食の海を望んで、浩然の気を養われた。

▼梶川蘇堂氏(西宮市)は八月十七日、岡山から米子へ一家総動員の旅をされ、皆生温泉から「あつ欄をこよなく愛す酒徒の昼」の句を寄せられた羨ましい限り。

▼川上三太郎氏(東京都)から路郎主幹へビールのお誘いがあった。曰く「大兄と小生でビール二打、四分六の率で飲みましようや」と。主幹は現在二本のビール

神経痛疲労に

リウマチ・便秘・間質・肺結核の補助療法にも

★新型ビタミンB1剤

アリナミン 糖衣錠

30錠
100錠
300錠

大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社

不朽の人々



明治三十八年（旧三才）

お孫さんでつかと
写真のぞかれる

（多久志）

もうそんな歳になりました。

私が底抜けのお人好と言われる所以はこ
の時代の童心を今も尚もちつづけている
からでしょう。
女にもてるのもそのせいです。

不朽会員ならどなたでも結構
です。われとわんものは珍
らしいものを残してください。

1 編集局

新刊

満喫して居られるが、早々、三太郎氏に太刀打ち出来るようこの方面の御回復をお願いする。

▼北九州、山陰、北陸、四国、關東各地方から、相次いで測候所始まって以来と云う豪雨禍、渾水禍の便りが無い込んだ。この欄を借りてお見舞い申し上げます。

句碑

▼青砥可明、柴田午朗両氏の川柳句碑が、古瀬迷調子氏の発起で、松江市稻荷神社境内、伯太町柴田邸にそれぞれ建立される。十一月三日完工の予定。▼鶴彬句碑建立募金。鶴彬が川柳人彈正事件の犠牲となって獄死二十周年、顕彰事業として、彼の句碑が生地石川県河北郡高松町に建立される。振って応募致されたい。一口百円宛先東京都世田谷区瀬田町八四八入民川柳社。

▼川維明和病院支部二十数名の集成に発る川柳句集「明和」が九月初旬発行される。定価百円。申込みは西宮市鳴尾町明和病院支部。

慶弔

▼麻生一歩氏（大阪市）は八月十四日男子出生、耕司さんと命名された。

▼蛭子省二氏（愛媛県）は八月十六日朝逝去された。享年七十一才。氏は元本社社友、現在洞友、明治三十九年川柳に手を染められ、其後古句研究のベテランとして名があり、本誌に故梅本秋麴屋、故森東魚と共に武玉川研究を十一年間に亘って発表し続けられたことは特筆すべきことであり、古句質疑欄をも担当されていた。氏の宿病喘息は数十年前のことで、最近五尺七寸の体が六貫目までに瘦せ、今

夏の酷暑をもて余しているとの便りに接し、大いに御同情申上げていたところであった。謹んで哀悼申し上げる。▼蓮台寺二十一世中興吉原寛樹師（奈良県桜井市）は七月二十二日亡くなられた。師は生前、大和清談会、川柳句会、川柳作品展等を蓮台寺で催され路郎主幹も屢々講演に赴かれた。（薫）

正誤

▼八月号33ページ三段五行目の川維にしなり支部を本社と訂正。

不朽洞

★常任理事会――

会から

後七時南区三休橋南詰中島生々庵居

で開催。
一、大阪市民川柳大会参加の件。
市教委との交渉の結果を路郎師から、その後の大阪川柳各社との打合せ会の経過を栗理事長から、そ

れぞれ説明があり、

イ、主催者に大阪川柳連盟を加える事

ロ、運営委員に短詩連盟から二名（栗、多久志）川柳連盟から六名のうち川維から二名（好郎、梅里）

ハ、講演者二名中、路郎師参加二、兼・席題選者六名中へ川維二名（生々庵、文蝶）

ホ、開催十月十九日（日）大毎講堂、詳細は本誌40ページ参照

一、不朽洞会総会開催の件

イ、十一月十六日（日）光明寺で開催
ロ、議題は任期満了の役員改選及不朽洞会振興策について
ハ、併催行事として句会及作品展覧会を行う。以上の事を協議、十時散会

出席者は、路郎、文蝶、古方、潮花、水客、紫香、没食子、梅里、好郎、栗の諸氏と多久志。（多）

・残暑御見舞・

大坂形水

大阪市東区糸屋一丁目

岸南柳

大阪市阿倍野区天王寺町五一ノ一八 男前製造所

麻生路郎

大阪市住吉区万代西五丁目二五番地

新人旧人の入選句数

河相すゝむ

川柳塔への投句が十句に制限されてから早や半年になる。折しも八月号の誌上で本多省三氏が、先輩よ motto 句を作れと呼びかけて居られるので、この辺で一度川柳塔掲載句を分析し、新人旧人の分布図と云う様なものの現状を数字で表わして見ることにした。

(新旧の境界線を人員の割振り上の便宜をも考慮に入れて、編集局の不二田一三氏にした。)

出句者	連句者	又是不没者	全没者
6名	24名 27%強	36名 40%	新人 (50名)
11名	46名 29%強	72名 45%	旧人 (160名)
17名 6.8%	70名 23%	103名 43.2%	全員 (230名)

右の表により

①全没者又は不没句者が不朽洞会員の半数に近い四三・二%に昇ること。

②連続出句者は(一ヵ月休載者を加えて)三五%に足りぬこと。

③新人の連続出句が旧人のそれに比して下廻ること。などが判明した。

次にベスト二十一の作家を挙げると、
(敬称略、括弧内は六ヵ月間の句数合計)

1	田垣 方大 (26)	9	有働 芳仙
2	橘高 薫風子 (25)	9	岡田 夜潮
3	若本 多久志 (24)	9	不二田一三夫
3	早川 清生 (22)	14	国弘 半休
5	後藤 梅志	14	浜田 久米雄
5	小浜 牧人	16	木村 水堂
5	西川 晃	16	武部 香林
5	仲 どんたく (21)	16	水谷 谷水
9	正本 水客	16	田村 藤波
9	須崎 豆秋	18	岸 本水府
9	須崎 豆秋	20	北川 春巢
9	須崎 豆秋	20	本多 省三

以上である。ベストテンは新旧相半ばしているが、二十位までは殆んどを旧人が占めて居られる。又以下五十位までのうち、新人の数は僅か八名に過ぎない。この事実から推して、ベテランは経験の豊富さと、作句技術とを上手に生かして、一応成果を挙げていられるものの、本多氏が飽き足らず思われる様に、かなりの不没句者が居られること。又、新人は、好調不調両者の懸隔が甚しく、多数の方々が、近作柳欄より川柳塔へ進出したものの、路郎先生の厳選に戸迷い、苦しんで居られる模様と察せられる。だが、それを突き破るのが修業なのだから、意気盛んなるべき新人の出句率がベテランより下廻ると云う不甲斐無さを蹴飛ばして戴き度い。折しも折、これから作句の秋、豊作の秋に入りますから。

大阪市民文化祭第十回川柳大会

恒例による大阪市民文化祭の川柳大会は左の通り第十回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されますよう、又どなたも出句の有無にかかわらず御米場の程お待ちいたします。

(主催) 大阪市・大阪市教委
関西短詩文学連盟
大阪川柳連盟
(後援) 毎日新聞社

日時 昭和三十三年十月十九日(日) 11時開場入場無料
会場 毎日新聞大阪本社講堂(市電桜橋)

講演 「明るい川柳生活」 岸 本水府
席題 当日二題発表

講演 「大阪と川柳」 麻生 路郎

兼題 「商 売」 堀口 塊人

兼題 「群 集」 中岡 三吉

兼題 「水」 選 中島生々庵

兼題 「親 友」 選 近江 砂人

川柳賞 大阪市長・教育委員長より贈呈

兼題投句 各題毎に郵便はがき一枚に二句づつ明記

大阪市北区中之島 大阪教育委員会内
市民川柳大会係宛(十月十日着限/切)

入選句集

当日会場にて予約受付(実費五十円)大会欠席のため、句集希望される方は投句の際、硬貨同封申込のこと

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社八月句会 (大阪市)

8月7日 午後6時

会場 光明寺

真ッ昼間は、強烈な日射しが都会を連日こがす。この炎熱下に身を鍛えるには海もよし、また山もよし。しかし心を養うには、作句またゲンとよしである。

昨年八月の全出席者は二十三氏であったが、本年は七月に三十六氏、八月になっても三十六氏とかわらず、33年度は30ライン突破は確実となり、句会部の努力がようやく実をむすぶ公算が大きくなったことは、路朗主幹のご健康と共にご同慶のきわみである。

蟬のたそがれコンサートをききながら八月の句会の幕があく。

久しぶりに清水白柳子氏の句評から始まる1作の句には弱さがあり、生む句にこそわれわれのいのちがあるときれ、八月号の川柳塔、近作柳樽から、形水(3句目)梅志(2句目)藤波(1句目)保美(4句目)水断(3句目)矢寸志(2句目)ひさみ(1句目)静馬(2句目)

宗太郎(2句目)花津代(1句目)白柳子氏のお好みで宗教の句として、丁路(1句目)守株漢(2句目)をあげ、更に氏が推せんす佳吟として、緑之助(2句目)清生(3句目)薫風子(2句目)諸氏の句を例に引かれた。

秋の作品展がやはり短詩文学連盟主催で十一月に開かれるので、ふるって出品するよう路郎短連理事長から要請された。

席題第一陣の西尾菜氏選が十九句という厳選。第二陣の川村好郎氏選がこれまた十七句という情無用ぶりである。どうやら本句会は全没記録が生れそうで、会場の心胆を寒がらせる。声あり「完全冷房や」――

待望の先生の選では、明和病院支部の吉本菁風氏が堂々二回目の不朽洞杯を握る偉業をたてられた。最近新人の台頭にすさまじいものがある。

(F)

出席者 一路郎・淡舟・豆秋・雄声・連・清人・文秋・奈良良子・一三夫・薫風子・高史・笑司・十悟・旅風・柳宏子・永断・省三・古方・木堂・利武・志ん三・いわを・葉光・晃・好郎・与呂志・句念坊・黙平・清潮・求女・狂二・いさむ・伸生・圭井堂・潮花・白柳子・鶴汀・牧人・堰子・麦稻子・青風・すむ・静馬・客遊子・進之助・菁風・月都・葉乙女・悟朗・六竜子・多久志・梅志・阿茶・梅里・千里・一瓢・樹峰・鳩花・葉・没食子・義弘・凡九郎・舟遊・博也・庸佑

・知恵・三司・紫香・繁雄・美恵子・安子・霞乃。

兼題「学歴」 麻生路郎選

学歴はないが気性が気に入られ悦子
学歴がこの一線を越えさせず どんたく
御時世は学歴ばかり取りあげて 一鶴
学歴はないが特許を三つ持ち 陽子
能率は言わず学歴だけにふれ 幽谷
学歴はあるが愛想なさすぎる 周甫
学歴の無い方が市長に当選し 美音子
右こ左べん奴は学歴ないさかい 一瓢
学歴を職安軽く聞き流し いさむ
学歴は小卒とあり紳士録 多久志
裏門を経た学歴と誰か知る 薫風子
稻門の出とアル中は別のこと 同
実力で来いと尋卒負けていず 晃
情熱に生き学歴は忘れとり 梅志
中退の其の我が儘がこたえて来 堰子
大学を出て尋卒に使われる 千里
びりでも大学出で通り 同
学歴を書架のどこかに見せなむ 古方
学歴にものを言わせて議長席 悟朗
落ちぶれてその学歴をかくすなり 白柳子
学歴の無かった先代様を恋い 圭井堂
学歴はないがのれんを守り抜き 水堂
学歴は言うなまあまあ飲んでは 伸生
井池の育ち学歴など言わず 省三
頭打ちして学歴をくやしがり 須賀太
申分ない学歴で嫁きおくれ 静馬
学歴が今更屑屋にもなれず 志ん三
学歴を聞いて女はあきらめる 清人
学歴に負けぬ男の意地があり 同

学歴にこだわらずした失業苦 清潮
学歴はどうあるとも工場長 同
学歴はないが話せる親父なり 柳宏子
学歴を言われるつらさ子に教え 句念坊
学歴を買われハワイへ栄転し 淡舟
学歴の初任給からある差別 連
学歴のあるのは学歴無視しとり 月都
学歴をアパート中にふれて呉れ 麦稻子
大学卒だけでは妻子養えず 同
学歴へ養子の口がかかって来 同
学歴にコネぶらすした新社員 客遊子
学歴が貰い手のない娘に育ち 永断
陸大と言う学歴が邪魔になり 菁風
学歴で後輩と知るなつかしき 宏子
仮名付けた祝辞読む身今は悔い 樹峯
学歴があつて批判が冷た過ぎ 葉光
学歴が無いが人間文化財 同
世間様勝手に学歴つけてくれ 奈良良子
学歴はどうあるとも代議士さ 豆秋
学歴のない三吉にさびしい日 一三夫
浅学を大言壮語で押し通し 園男
学歴がなんやと古参すねている 鳩花
学歴は要ると親爺の物判り 博也
学歴に先ず母親が乗気なり 園男
自家用車無学文旨とは見え 豆秋
学歴がアツハツとごまかされ 阿茶
さあまずは学歴かくす字も習い 阿茶
姑の学歴へ合う嫁がなく 知恵美
学歴の有る勝負師で線細く 菁風
大学中退声優として知られ 路郎
アメリカの夜学ですかこからわれ 同

兼題「マネキン」 戸田古方選

札束にされると他人の金になり 梅志
札束でなら打たれたい頬べった 一瓢

席題「脇役」 須崎豆秋選

脇役が主役を喰って叱られる 淡舟
脇役にそつと台詞を教えられ 多久志
脇役を買う父であり 鷹泊郎 梅里
脇役のうまさを通してほめる 博也
脇役のきてん主役がはめてくれ 同
脇役は憎まれるのに苦心する 牧人
脇役になくはならぬ人となり 甫佑
脇役でうのうとした謡いぶり 梅志
脇役にまわつて弟子にやもせて見 阿茶
脇役の人気主役の気に入らず 進之助
芸道の苦勞 脇役骨にしみ 梅志
箱登羅の在りし日のぶ好劇家 一三天
脇役で社長のおもちもやり 梅志
脇役の切られてからの演技なり 与呂志
脇役の淡々劇評見逃さず 一三天
脇役のヒゲが社長と間違われ 多久志
脇役の影の力へ拍手する 旅風
脇役はドロドロと消えちまい 月都
脇役がどつこい一枚上でした 十悟
脇役も博士ぞろいの手術室 阿茶
家柄を言わず脇役引き受ける 白柳子
素人劇脇役なので寄付を減し 没食子
座長子にゆすり親父の斬られ役 求女
堅うなるたちで話のワキをとり 梅志
脇役が主役を摸る役がつき 圭井堂
批評家は脇役ばかりはめて居り 水堂
脇役に回る師匠へ気がつかれ 狂二
脇役も家では床の間に坐わり 圭井堂
脇役で白粉を塗る手間も無く 豆秋

席題「ボート」 川村好郎選

貸ボート看板娘も消えて秋 奈良子
アベックのボートネオンの灯を砕き 梅里
バラソルでかくすボートはひやかされ 同
良いパパになつてボートは磯づたい 一瓢
アベックの中を独りや漕ぐボート 多久志
父ちゃんのスリル子供が危ぶなかり 水堂
アベックにボートの時間短かすぎ 静馬
愛情の腕を見せたいボート漕ぐ 永断
アベックのボートへ無粋な橋の声 一三夫
主のない雨のボートは事件めき 舟遊
打ち明ける積り木蔭へボート寄せ すむ
ボート屋は大分熱い恋と知り 多久志
言い足らぬ分をボートへ秘めて乗り 圭井堂
ボートも二人ベンチも二人中の島 榮
貸ボート一つ帰らぬ夜の海 狂二
しあわせはボートの揺れさううれしがり 連
ボートもう裏返つたまま海も秋 好郎
席題「のれん」 西尾 榮選
株式になつてのれんを持ち直し 水堂
ゼット旗のようにのれんを今日も吊り 阿茶
質のれん人の気配も見えずゆれ 紫香
新装開店のれんは前のままであり 青風
のれん分けじゆん論すお家はん 牧人
のれんから看板娘 顔を出し 晃
こいさんの目が呼んでる中のれん 堰子
止そうにない雨のれんから覗き 豆秋
繩のれん隣も政府くさして居 清人
のうれんの後家になつても衰えず 阿茶
のれん守る老舗はさんでパチンコ屋 柳宏子
常連になつた動機はのれんの字 旅風

のうれんを守る白髪がいたいたし すむ
のれんもう店の傾斜を感じとり 葉乙女
三代ののれん螢光灯に映え 省三
のれん分け女中の恋へさりけなく 奈良子
そるばんの堅さのれんを譲られる 省三
定年が迫りのれんに今日も酔い 笑司
キャツシユなら売りたいのれんまもりたし 一瓢
(庸估清記)

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)
古川麗花麗報

父の名でただ父の名で生きただけ 斧平
左前小言の多い父となり 柳葉
子の目にも母の苦勞は父の酒 草一郎
移民史と共に歩んだ父九十 八丁堀
父と云う名でもう一本つけさせる 麗花麗
厳格と云う字に見える父の顔 草一郎
父の日に嫁いだ娘等の贈物 北海
父さんはやるぞと誓う子の寝顔 いつ生
一本で都々逸の出る父であり 暁舟
恩給の父は日本で死にたがり 拝山
敗れても父君が代の歌がすき 同
君が代をよどまず歌う父音痴 八丁堀
美人にはなりたくないと云う悲劇 泉水
ツンとして視線避けなく集めたく 草一郎
自他共にゆるす美人が嫁き遅れ エス子
移る世の美人は足がものを言い 氣七有
良い星の下に生れたミス日本 虹橋
コンテスト美人の表情固くなり イツヨ

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)
金井文秋報

畏み畏み拍手が鳴る御神燈 進之助

川維 淀川支部句会 (大阪市)
武部香林選

ハンカチの移り香をつと噛みしめる 灯子
ハンカチをもて遊んでる初対面 文、児
ハンカチもしわくちのままだる意期 三十郎
ハンカチに包み切れない感謝状 若菜
割込みへ女の時のつよいこと 句念坊
割込んで来た娘がワキが臭わせる 幽谷
行列へ肩で割込むサンダラス 東洋男
割込みへ素直に席を譲る 輪水堂
保険屋はあの手この手とあきらめず さぎす
嘘と嘘あの手この手の世に負ける 三司
菓子ねだるあの手この手を聞いてやり 礼司
甘えてもみたりすねてもみてもねだり 多久志
左前あの手この手の逃げを張る 香林

川維 にしなり支部句会 (大阪市)

御神燈を吸うた浴衣の仇な藍 亜鈍
御神燈の船場に床し紋どころ 梅里
えりあしも鏡花の世界御神燈 立児
我儘な男を母の氣であやし 葉光
さみしさはどんな我儘でも通り 一三天
膝で割る西瓜蟲のままでの味 奈良子
中を見たように西瓜屋云うて売り 十悟
切西瓜水の上で寝て残り 樹峰
おちよほ口赤い西瓜へかぶりつき 豆秋
主の外男は星の敷にされ 文秋
千秋棠星もおんなじだん組 堰子
焼け跡の星がこんなに美しい 水客
サックドレス自慢の腰の線が出ず 甫佑
サックドレスいわは近代アッパズ 唯義
曲線美などは構わぬサックドレス 大路

後藤梅志選

夜の風ホテルを連れて川をこえ 五色
出て見れば夜風もあつた星の数 省三
氷のうを替えて夜風へハッと立ち 連
一本のラムネ温路は分けて飲み 梅里
咽喉仏動いてラムネ空になり 満潮
子を連れて来ればよかつた蟬の声 文秋
ふるさとの昼寝を蟬に起される 杏花
家に居てさえも汗をねぎまれ 以兆
汗かいて納涼大会から帰り 柳宏子
アルバイト働く汗の価値を知り 牧人
湯上りの汗もどかしい客が来る 敏子
鶴嘴へ生きる裸に汗光る 北州
禿けているとこへ集まる汗のつゝ 晃
麗人の汗は押えるだけで すみ 流水
かも瓜のような顔して汗しらず 蘭
老舗の看板はげたままで よし 悟朗
看板のたぬき叩いてさようなら 玲人
見られてる中で看板書き 遅え 堰子
伴せはすべて善意にとつてくれ 青風
墮ちるとこへおち初めて知る善意 すゝむ
善意とは知らず友情ふみにじり 多久志
お互いの善意を噛み合せて 貧旅風
駆けつけた顔に善意がこぼれ落ち 薫風子
井池の看板旗がぶら下り 梅志

川維 からはり支部句会(大阪市)

徳永雅美報

先生と呼ばれ話方まで変り 柳宏子
屋台店先生だから顔がさし 文秋
PTA贈った服が壇に立ち 貞句朗
先生の眼に光るものあり謝恩会 清子
先生の所詮チヨークと老う運命 六竜子

十年もたてど白衣の義手義足 栄治郎
ギター弾く白衣へ同情忘れられ 井平
同情をする 倅をふと感じ 一栄

川維 京都支部句会(京都市)

田中島俊報

町中にけずられた家横を 向く 紫瀾
チズがバスターかアメリカ婦人の中が来る 磯
花道の中が中仙道となる 豊次
取組んだのが哲学と言う暗さ 司郎
取組んでしまった今をつくすのみ 親生
総踊り口説いてたのが立遅れ 鳥雀
今の立遅れを取口分解されている ゆきら
小川飛びそこねトンガ逃げて行く 九角
何やかや小川ゆっくり物浮かべ 句念坊
街へきた小川は石垣の中を抜け 晴芽
石がきの雑草恵みの花をもち 秀徒

川維 倉敷支部句会(川柳まつり)

梶原一善選

ハンカチはフケを嫌った膝枕 春也
バラソルの模様が予算狂わせる 萌芽
やせた事膝枕してよくわかり 流雲
別居までテストしたい程平和 一春
大学を出た百姓でうとまれる 陽子
膝枕これもチップの内でさせ 幽谷
別居してみれば家計に目立つ無駄 葵丘
発展の道路が長屋立のかせ 香春
亮春法いままら百姓にもなれず 鳳月
膝枕枕の夢を見てるらし 隆文
膝枕家賃の事も話すなり 鈴坊
膝枕社長の予定変えさせる 狂風
金魚すくい親が夢中になり出した 平平

別居した夫人が書いた真相記 天風

膝枕するのにスカートみじかき 笑雷
潮が引く様に長屋は夜になり 桂月
政治より百姓明日の雨を待ち 素身郎
肩書があつて別居も許されず 銀子
別居して又恋人のようになり 風の子
まるつきり別な夢みる 膝枕麗水
特価品売場でバラソル持てあまし 一善
所得税雅号の方が上まわり 万古
膝枕子にみつかった照れ臭さ 谷水
別居した日からしまったと思ひ 方大

川維 備前支部句会(岡山県)

三村柳風子報

細腕の方が小金を溜めている 一声
母という強さで稼ぐ細い腕 三六
細腕と細腕同士馬が合ひ 竜泉
細腕で育てあげたに楯をつき 承平
細腕にあつた粘りを見直され 柳風子
細腕が捻りの秋へ見直され 浄美
五千円札でへそくりかまされず 永流
拘った紙幣持って涼しい客になり 娘句楽
心付けの紙幣は小さく折つて出し 伊久野
二次会へタクシード行くこと決め 清春
八十円だけタクシードでそり返り 陽子
人相を気にしたタクシード走り出し 晶晶
タクシードへ乗せられたまで覚せい 東岸
タクシードを尻目に歩くことに決め 久米雄
妾宅へ来て土砂降りを嬉しがり 自娘句
どしや降りにはタンの屋根のロカゼー 万女
年の功戸籍係を手古ずらし 幸仙

川維 木次支部句会(鳥根県)

藤井明朗報

月末は妻の分別借りてすみ 清夢
月末は一円札もかり出され 澄子
雑巾に惜しいゆかたを又しまい 同
集金にも行かず借金取りも来ず 隆昭
涼み台ビールをかけて負けられず 綾美
はれもののように家出は迎えられ 春桜子
旅空の夜が淋しい家出の娘 迷調子
十代の家出ネオンが招くよう 寿美子
カシタに立てば家出の娘に見え 幸夫
家出した息子の便り金送れ 明暗
むこ選ぶようにゆかたの柄をより 松本
ゆかた着て又引かえす祭の灯 明朗
ビヤホール妻と一緒に吸い込まれ 同

川維 篠山支部句会(兵庫県)

小西無鬼選

伏せておく話は時々燃えたがり 初穂
両親へもう伏せられぬ仲になり 日竿
伏せてある茶碗の前で聞く小言 ゆたか
青春の償い利子にまだ追われ 左文字
利子を生む筈の頼母子利子も喰い 文峯
城崎へ利子の分だけつかりに来 一両
利子に利がつく御身分で床に伏し 越山
ニコヨンの汗に利子など夢もなし 小菊
親子して選つたにせつちかち嬌もい 雅佐女
ボケットの手が無雑作に車券買う 秋月
ボケットへ無理に入れさう小さい義理 永断
ボケットのレターを母は読んだらし 岳詩
せつちかが乗つてから釣銭思ひ出し よし子
末っ子程せつちかになる子沢山 枝葉
せつちかが貧乏ゆるぎして待機 白猫児
いざと云うときせつちか間に合はす みのる

せつがちが又僕の下駄履いて去に 無鬼

川維 弓削支部句会 (岡山県)

真原七面山選

石垣に乙女のような花が咲き 水雲
失恋の心冷たく石を蹴り 銀子
石蹴って君の浮気をあきらめる 賤女
石一つ入れて金魚の住家とし 美沙
上役の小言に堪えている 無口 只世
結局は無口が勝った口喧嘩 喜楽
姑の愚痴が養子を無口に 流風
午前九時恋を居けるポストマン 知恵美
午前九時一家心中の戸が開かず 七面山
午前九時下つ端だけがペンを持ち 竜児
同伴で表彰受ける功労者 南鯨
旅の宿妻同伴で来たを悔い 雅風
出まかせでとりとめもない子守唄 不老
音痴のババが教えている子守唄 たまの
浮気する父に似るなど子守唄 たつよ

川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

寄附筆頭母校をビリで出た男 光郎
役員になって学校へ顔を出し 酔羊
海山の日灼け集る新学期 恒雄
夏山の便り雪景を満喫し 魯水
イヤホーと叫びたくなる夏の山 久雄
夏の山木の香も新し道しるべ 枝
三合目辺りで時雨れる夏の山 味平

川維 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満選

北枕昼寝の夫気にもせず 八文銭

祭客手土産ほどは飲んで行き 秀和
飛入りへ掛けて買ひ足す 祭酒 星影
自動車も止めて祭は踊り出し 三步
飲み過ぎが昼休憩をきつちり寝 遊星
同僚も来てお祭が派手になり 耕民
強制はせぬがと祭の寄附が来る 湖山
川柳吟行岩の穴まで見て 帰る 茗人
夜星まで働く昼寝四時をすぎ 日満

川維 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓報

うつむいたまに田植は話し合い 酔雀
雨降りの田植一幅の絵となりて 常香
傾いた家運詮なし母と守る 蟬蛇
気にかかる化粧へ熱い中華そば 梅林
風呂に行く迄の化粧を塗り直し 海鳥
お見合へ男まさを消す化粧 実松
化粧品兄が時々つけにくる 松風
ベビー蚊帳のおくババママに夢があり 迷窓

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

初揮毫素直な出来と賞められる 太希志
簡抜作戦に散ったあの児をいこしむ 同
母の声聞いて素直に縛につき 一哲
差押え来たよと孫はふれ廻り 同
簡抜けを承知でいやみ云つてやり 小石
よろめいたことと既に知れて居り 一伸
腕押しは先ず腹芸にしてやられ 生々庵
モスクワでこの腕押しは負けられず 同
簡抜けのわけを落選して気付き 同
倦怠期妻の素直が氣に喰わず 珊枝郎

南海電鐵川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

丹下左膳になる子やつはり左利き 關
エキストラ御用御用で日を暮らし 同
サックドレス象のスタイル頂戴か 光治
サーカスでお花ちゃんとは象のこと 玲人
象の背にゆられて釈迦にある疑問 のぼる
郊外の朝は雀に起される 狂二
戸惑うて出口忘れた雀の子 同
一人居て雀も来ない淋しい日 宏子
熱魚帯入れて食堂涼を呼び 同
独りぼち親に離れた雀 銅う 雄声
独り子がねだつて買った熱魚 同
貰ったが可愛げのない熱魚 梅志
撒いただけ雀きつちりたて去に 同
金になると聞いて飼う熱魚 ヨチ坊
熱魚を覗いていたらいっしょに 玲人
サーピスに呉れた熱魚が死んだ 同
熱魚ききれいだなあと失業者 圭水
熱魚社長に機にでんと居り 同

明和研究句会 (西宮市)

薫風子報

おめでたへそわそわするは親の方 すみ江
夏みかん食べればお目出度かと聞かれ 弦月
お目出度い還暦迎え淋しがり 寿栄
未亡人婿を買って嫁に行き 三舟
ガラス玉と知って男の面子立て 舟遊

ガラス張りと言ふ経営で黒字なり すむ
お勝手の電化男に用が増え 知司
母へ抗う台所で音を立て 光子
転居先ず台所から棚を吊り一杯 策平
台所を占領して洗濯機 策平
出勤にどなられている台所 青一路
借金をしていると見えぬ台所 真人
台所だから気安く釘をうち 薫風子
自信ない様に云つて油断させ 芙路
玄關の前で自信が崩れて来 憲一
委員長自信の程を披歴する 彗星
野放しの自信で暮す太い肚 義子
まだ若い自信鏡が承知せず 文女
好みだけ似合う夫婦で火の車 丹謡
菊作の好み不遇の世が長し 園男
店員の好みそのまま買つて行き 球絵
奥さんと間違えられた好み のぶ
四十の好み淡味に赤を入れ 東雲
常連の好みに店も模様替え 川太郎
女子寮は好みの色で窓飾り 和子

鮎と料理と酒

アベノ橋地下映画食通街

千日前 大劇裏

梅里の店

大萬

★大万川柳(第九十一回)を募る

兼題「顔」路郎先生選

締切 九月十五日 句数五句以内

発表 九月廿一日 (店内掲示)

投句は 阿倍野区松崎町三丁目

一〇 大万川柳会宛

所題時 小松句会 1日(月)七時 実力・うつかり 小松市大和町 伊藤茶仏居	所題時 南海電鉄句会 25日(木)六時半 十戒・二学期・献立 ナンバ駅高架下親和くらぶ	所題時 明和研究句会 14日(日)一時 現職・制服・デラックス 西宮市鳴尾町明和興業KK和室	所題時 333句会 13日(土)六時 切符・朝日・いざいざ 堺市老松町三丁島野工業会議室	所題時 交通局句会 10日(水)五時 落日・反対・苦手 爾橋交通局病院サンルーム	所題時 訂正・籠 9日(火)六時 大道一ノ二天王寺小学校	所題時 みおつくし句会 9日(火)六時 玉出新町通一の一一梅志居	所題時 にしなり句会 18日(木)六時 恩借・秋・腕白 玉出新町通一の一一梅志居	所題時 阿倍野句会 17日(水)六時 あだ名・半身・案内 金塚会館(旭町二丁目)	所題時 玉造句会 10日(水)七時 専門・来月 大阪信用金庫(市電玉造南二丁)	所題時 淀川句会 3日(水)六時 グループ・盛り場・わがまま 十三西之町東淀川郵便局
所題時 弓削句会 末日(切)投句のみ 宵待草・月明り・白・未練・意見 岡山県久米郡久米南町下弓削四五直原七面山	所題時 秘密・床屋・里 尾長町東山根角上利居 21日(日)十時	所題時 岡山句会 20日(土)十二時 切符・通過駅・忠告・手相・早合点 岡山鉄道第五寮公園	所題時 備前句会 20日(土)六時 不死身・千鳥足・生返事・案山子・御馳走 大森娘句会居	所題時 京都句会 16日(火)夕 聖・腕・宝物 仲源寺	所題時 宇部句会 14日(日)一時 喰い気・はったり・酔心地 東区恩田長沢 津秋六花居	所題時 気まま 14日(日)一時 ささやき・ひとり言・すすき 公会堂 日本間	所題時 篠山句会 13日(土)一時 反対・漏る・乗り心地 篠山町立町 池富旅館	所題時 倉敷句会 7日(日)一時 気取る・ロカビリ・失敗・ハ 水島弥生町四ノ三 唱原一善居	所題時 出雲句会 4日(木)七時 速達・欲 出雲市中央公民館	

●青ペン・赤ペン●

▼日、一日と快方へ向う先生に、またおよろこびが一つ。麻生一歩氏に耕司ちゃんという赤ちゃん誕生がそれである。梨里前編集長の哲夫ちゃんこれで二人のお孫さんのお祖父さんになられたわけである。めでたいかな。

▼先生は、相変わらずお忙しい。公私多忙が解消しないかぎり、当分「公私雑記」へご執筆ねがえないのではないかとと思う。一例をあげると亀井花童子氏が亡くなられた時も本誌へは何も書いていただけなかったが、函館川柳会には相当長い原稿を送られたのである。私も読ませていただいたが、よそ様へ渡すのが惜しい原稿であった。それもその筈、百冊以上の雑誌から記録を正確に調べられ、先生でないとい書けない貴重なものなのである。

▼西島〇丸氏、井上信子氏、大谷五花村氏、亀井花童子氏と相ついで柳界の大物が亡くなられる矢先き、本月また蛭子省二氏(えびすせいじ)本社洞友——の悲報に接した。合掌。

▼前号の「大阪の民俗を語る」は評判がよかった。

「川柳文学」の堀口塊人氏からもおほめをいただいた。ありがとうございます。

▼緑内障でいつ失明するかわからない、せめて眼がいていよううちに、大いそぎで仕事をしておきたい。この情熱が、前号にもちよつとふれておいた「須崎豆秋論」なのである。その筆者高鷲重鈍氏が、次回作に着手したとき。

ご健筆を祈ると共にご全治をあわせて祈ります。

▼「春葉・古方対談」これはもっと早くとりあげねばならぬものであったが、やつと本号で実現を見るに至った。片や近作柳樽、片や入門講座と、重要な部門を担当されている両氏の対談から、新進作家は何かをつかんでいただけたと思う。

▼山路閑古氏から久しぶりに快筆を得た。これは次号へ温存しておきたかったが、うまい物は宵に食えーと、いうことをそのまま本誌で実行した。

▼東野大八氏の「柳風三国志」は号を追ってますます佳境に入る。品川陣居氏の

社告

投稿の切日変更

十月号から、すべての原稿を毎月十五日に切り替えます。川柳塔「近作柳樽」「一路集」から各地柳壇、文章等々五日間早くいただくことを御留意ください。一日でも早く雑誌が発行できるよう、大方のご協力をお願い申し上げます。

川柳雑誌社

軽妙な筆致、富士野鞍馬氏の華麗な才筆。けんらん多彩な執筆陣に飾られておくる新秋九月号も、八月号にひきつづきおほめいただけるものと思っている。

▼私の作句法は今月かぎりでおわるが、執筆者諸氏にお礼申し上げます。

▼本号から橋高薫風子氏が「柳界展望」を担当することになった。清らかな文章で本誌も一段と明るくなる。ご期待ください。

▼きよう(二十五日)台風17号が近畿を襲うとあってはえる風雨への抵抗だ。

▼台風は二府九県を荒しまわった。被害地みなさまにお見舞い申し上げます。

▼毎月第二水曜日に編集会議が開かれる。ときには火を吐くような議論の応しゅうもある。今月はアベノ支部の木村十悟氏が、陣中見舞として西瓜をとどけてくださった。ありがとう。

☆大阪市民文化祭行事

恒例の行事を左の通り開きます。詳細は各新聞並に各結社誌上の予告及連盟の案内等により御承引の上市民文化興隆の為絶大の御協力をお願い申し上げます。

第七回	短歌大会	十月五日(日)	朝日新聞社講堂
第二回	詩の大会	十月十八日(土)	読売新聞社講堂
第十回	川柳大会	十月十九日(日)	毎日新聞社講堂
第六回	俳句大会	十月廿六日(日)	朝日新聞社講堂

主催 大阪市民文化祭実行委員会
後援 各新聞社

正本水客・黒川紫香・丸尾潮花著

川柳句集

三人

定価 二百円
送料 二十四円
B列6号
二百余頁

句集刊行に就いて

路郎門の逸材、正本水客、黒川紫香、丸尾潮花の三氏が川柳精進三十年の収穫の中から特に優秀なる作品を選出し、恩師麻生路郎先生の校閲を経て弘く世におくり、その真価を問うため来る十月中旬を期し、川柳句集「三人」を刊行することとなつた。

三氏は小学時代の同期生であ

るが、社会に出てから異なる職域に就いても絶えず親交を続け、趣味も亦轡をならべて川柳に遊び早くより川柳不刊洞会員として二十有五年の歳月を斯道の研鑽につとめられたことは柳界にも稀に見る存在である。

かかる三氏が元就の放智に倣い相協力して一巻の句集を編むことは三氏三態の異色のある作品に光彩あらしめ目つ詰むもの

「をあかさない点で最良の方法ではないかと思う。

三氏の作風については既に定評があるので今更喋々を要しないところであるが、水客氏の作品は常に高度の句品を保ち、その旅行吟の如きは特に優秀で、読者をして氏の句境に共に没入するおもしろいものがある。紫香氏の作品は情味に富み、特に氏の「目」による動物吟の如きは他氏の容易に追隨を容さぬものがあり、潮花氏の作

★出版予定日・昭和三十三年十月中旬、五百部限定出版

大阪七五〇五〇番を御利用が便利です。(切手代用可)

発行者

川柳「三人」刊行会

発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五の二五

電話 大阪 六〇八二
電報 大阪 七五〇五〇番

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大阪一名古屋	2時間35分
大阪一宇治山田	1時間54分
名古屋一宇治山田	1時間34分

大阪上六発	名古屋発	宇治山田発
7.40 15.40	8.00 16.00	8.40 16.40
8.40 17.40	9.00 18.00	9.40 18.40
11.40 19.40	12.00 20.00	12.40 20.40
13.40	14.00	14.40



本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

募集

課題吟募集

女磨子大	戸田古方選
靴船	友淵貴山選
風船	杉谷湖山選
短氣	清水白柳子選
名士	大西八歩選
	三鴨美笑選

近作柳樽

川柳塔	北川春巢選
文章	麻生路郎選

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」への投稿は不刊洞会員に限る。

川柳雑誌

第九号 定価 六〇円 (送料四円)

(禁轉載)

昭和三十三年八月廿五日印刷
昭和三十三年九月一日発行

半力年 三三四円
一力年 七二〇円

編集兼発行人 麻生路郎
行印刷所 大阪市内万代西五丁目二番地

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八二
電報 大阪 七五〇五〇番

printed in Japan

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和二十三年九月一日発行（毎月一回）（日金）

編集 桑田 孝
発行 印刷人

麻生堂印刷

金沢市 川柳雑誌社

大蔵省 住吉局区内 万代西五丁目二五番地 電話大阪六〇九一 郵政口座大阪七五〇五〇番

定価六十円（税別）

水虫の専門薬



水虫には、断然御好評をいただいているアルバー！ 乾いた水虫には液、湿った水虫には粉末、両方に使える軟膏！ 3種で水虫の立体治療を！

アルバー



粉末



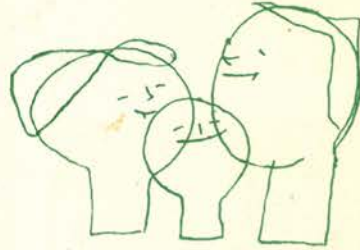
液



軟膏

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 64551-2

あみ上りのよさ



スキー毛糸

落着いた、深みのあるスキー毛糸の色はツートーンのセーターやカーデイガンに最適です。今年もスキー毛糸で皆様の個性美を活かしましょう

倉敷紡績株式会社



IWATANI

お台所で
きつと重宝！

すぐ使える便利な
ポータブル・ガス

簡単なつめかえ
でいつまでもご
使用になれる
マルキプロパン
は、経済的で
は、完全に気化
する商品位ガ
スを使っており
すから安全で、
ガス中毒の心
配ありません。
人替ガスはお電
話一本で迅速に
配達



マルキプロパンガス

ガス業歴32年 岩谷産業株式会社

本社 大阪市東区本町3 電話大阪28代表5251・8251